

The Meaning of Rotary

ロータリー解析

Vivian Carter 著

田中毅 訳

ロータリー解析 目次

前書

7

編集者序文

23

ロータリーの綱領

28

第一章 奉仕理念

29

ロータリーの新しい歩みとは

31

理念と理想家の真の姿

33

職業分類は何を意味するのか

37

公共福祉への関心

39

ロータリーの使命

43

第二章 職業上の奉仕

45

ロータリー道德律の起源

46

道徳律の論拠	52
事業上のスローガン	54
新しい実業界	57

第三章 社会奉仕	61
-----------------	----

ロータリーの為すべきこと	63
目的を持った活動の選択	65
ロータリーの証明	69
青少年福祉活動の起源	71
市民としての活動	75

第四章 知己と親睦	81
------------------	----

奉仕の機会として知り合いを広めること	81
会員の選考	82
親睦を深める方法	84

ロータリーの実績	86
活動分野の広がり	88
ロータリーの親睦の社会的有用性	90
教育部門	92

第五章 ロータリーと産業

経営者階級の力の限界	96
個々のロータリアンと産業との関連性	98
義務を成文化する試み	99
現実的な解決策への要望	100
経営者の代表としてのロータリアンの義務	101
もっと大きな問題に対する心構え	105
労働争議として可能な行動	107
調停者としての経営者	109
労働者と分かち合うための提案	110

ロータリーにおける職業上の代表	112
労働組合の代表者	113
労働者のための職業分類	114
従業員のロータリークラブ	116
要約	117

第六章 国際理解と善意と平和 119

綱領第6条の起源	119
戦争の根本的原因	122
政治におけるロータリー理念	125
ロータリーと国際連盟	128
善意に対する現実的な援助	130
職業倫理と世界平和	131
贈収賄	133
不道徳な慣行	135

第七章 ロータリーの歴史

生みの親と創立者

名前の起源

親睦の喜び

ロータリー宣言

全米ロータリークラブ連合会結成

ロータリー宣言の採択

道徳律の採択

限定会員制度

イギリス諸島のロータリー

海外の活動

ヨーロッパ上陸

ロータリーの組織

地区組織

地域管理

160 158 156 154 153 150 147 146 144 144 141 140 139 137 137

財政

第八章 ロータリーの未来

ある推測

限定会員制度の根拠

限定会員制度の力

訳者あとがき

文庫版について

162

165

165

167

168

181

188

前書

国際的発想

ジョン・ゴールズワージー

「国際的な発想の交換によつてのみ、世界を救うことが出来る」

1914年までの戦争と平和の繰り返しは、人間同士の習性をよく知っている者にとつて、幻滅以外のなものでもなかった。人間性の追及のみに心を奪われ、現実の生存競争にうとい彼らは、その事実から目を逸らしていた。人生を生き残ることに賭けている人たちにとつては、人間によつて人間が騙されることは日常生活の一部になつてしまつて、いまさなら良心の呵責を感じることもなく、みんながやっていることとして、特に驚くような経験ではなくなつてしまつていたのである。言葉の上では恐ろしいことだが、それが現実の姿であつた。人生についてみんなが

考えている一般的な考え方ではなかったとしても、それが現実の真の姿であった。人生のほとんどは、長い戦いで明け暮れている。ある人にとっての成功は、別の人にとっての失敗でもあり、協力とか公正といった言葉は、人生の根源にある冷酷さとか競争を単に和らげるものに過ぎない。従って、彼らの叫びが地域社会における良識と世論であるという事実さえなければ、その幻滅を覚まさせることは、そんなに重要なことではなかったのかも知れない。歴史や詩や小説や演劇や絵画や論文や説教は、我々に教養をもたらす文化の表現である。だから、その点に関する限りでは、真理に最も近い存在にいるもかかわらず、この世に幻滅を感じている哲学者たちは、たぶん、人間の本来の本能よりも役立つ存在とは言いがたい。我々はいつも我々と共にある真理の微かな合図を必要としており、真実は何ものにも勝るべきものであると共に、努力しただけの成果が期待出来るものであって、まったく絶望するには当たらないことを、常に主張し続けることが必要なのである。我々はとかく物質面に捕らわれ易いが、素晴らしいインスピレーションこそ、道徳的な理念の本質と言えるのかも知れない。

人生を逃避する技として、極めて情けない存在に過ぎない哲学が、奇妙な概念を創り出して、空しい意義をさも真実のように見せかけていることは、非常に残念なことである。文学は自己陶醉に耽りながら無謀とも言える方向に進んでいき、科学は石炭の煙を減らすこととか癌を治すことよりも、毒ガスを完成させることに希望をつないでいる。宗教は観念論の翼の中に頭を潜り込ませたままである。この現象は、まさしく、一番信頼していたものから、黙って見放されたようなものである。

その中であつて、未だに理想主義の旗を掲げているスポーツこそ、規則を遵守する精神や、試合を繰り広げている最中ですら、相手に敬意を払うことから、たぶん、現在の世の中で最も救われる価値のある存在であろう。スポーツのフェア・プレイの精神が国際的な活動に君臨するようになった時に初めて、今までジャングルを支配していた虎やライオンに代つて、人間が進出出来るのである。

世界をざっと見渡しても、大変な窮地に立たされている現状を見渡すことが出来る。幾つかの国では、焼き払われた村の中で、何とかして文明人としての尊厳を守ろうとしながら、薄いベニア板張りの、時にはベ

ニア板すらない状況の下で、自分の家を建て直そうともがき苦しんでいる。疫病から蘇ろうと生死をさまよっているような混乱の極致に立たされた恐怖に襲われて、国々は初めて平和への歩み寄りをするのである。そんな機会でも訪れない限り、良心が目覚めないのだろうか。

「国際的な発想の交換によつてのみ、世界を救うことが出来る」という言葉は、国際的な考え方を交換するために、我々が設立したいいろいろな機関に、もつと注目すべきであるという、トーマス・ハーディ Thomas Hardy の言葉である。国際司法裁判所や国際連盟や全米会議などの、国々の代弁者のような組織は、それぞれの国の利己的な考え方が交錯して、たまに開かれる国際会議は、各国の思惑が入り乱れたものに過ぎない。

最近設立されたペン・クラブは、友好的な目的を持った作家たちの国際的な組織であり、政治的な意図はまったくないものであり、ボーイ・スカウトの活動や国際ロータリーの活動も同様である。こういった組織はおしなべて、世間の人々からはそんなに重要なものだとは受け止められていないが、我々すべてが住んでいる世界を救うためには、是非とも必要なものである。それならばどうして、世界を救う現実の方法に、もつ

と多くの関心が払われないのだろうか。それを無視しようという議論は次のようなものである。

権力は常に人間の生活を支配してきたし、これからも支配するだろう。人生とは基本的には競争である。協力や正当性などというものは、現実の問題として、これまで大きな犯罪が起こったことのないような、限定された地域社会においてのみ、その効果を發揮するものである。柵で囲まれた限定された地域社会における原則は、個人個人が犯罪者に抵抗する基本的な力を彼らに与えているだけに過ぎない。従って柵で囲まれていない国々には、そのような原則はないし、もし現実には、犯罪だと呼べるような確固たる信念を持たないで法を犯したとしても、その犯罪から自分の国を守ることを確約するような基本的な力もないのである。

これは、頑固な頭をしている人たちの、平均的な考え方である。もしも、こういった考え方が蔓延し続けるのなら、世界を救うことはまったく不可能である。「どうして？」 頑固な頭をしている人たちは尋ねるだろう。「そんなことは、いつも考えていることだ。世界がどういかなってしまおうとでも、言いたいのか？」 まったく、その通りである。

しかし、従来から不充分であつた人間が生存出来る条件が、最近になつて改善され始めたという状況には至つていない。物を破壊する科学技術は異常ともいえる勢いで発達している。あまりにも速く開発されているので、国家の権利や関心を各々の国が無責任に主張すれば、世界が廢墟と化す日も間近であらう。物を破壊する力の方が、物を創造する力よりも速いことは、疑いの余地はない。往年の 30 年戦争では、国を疲弊させる必要があつた。今のところまだそうではないとしても、空襲によつて大都會を破壊し尽くして、一週間で国を疲弊させることが可能な時代が、すぐやつて来るに違いない。深く考えることなく歡喜に酔いしれた大空の征服は、その恐るべき可能性の誘惑にかられながら、何かと理屈をつけながら使うにはうつつけのものとして、我々が簡単に使い始めたことによつて、今まで降りかかったことのないような、最悪の事態を引き起こしたのである。

前回の戦争で飛行機を使うという新しい状況に直面して、これに驚いた気の弱い国々が、破壊的な目的のための飛行と、化学兵器の使用を満場一致で禁止することを、はつきり意思表示するという結果につながつ

ていった。大空を征服することは、偉大で素晴らしいことを達成したことであり、これを否定する人は誰もいない。それを成し遂げた国家が、誇らしい偉業を達成したとして、その偉業を否定する人は誰もいなかったが、当時の人々は、その発明がそのような恐るべき破壊兵器を招くことになるかも知れないという、かなり確立の高い見解には未だ到達していなかったのである。我々は、戦争は恐ろしいものだから、戦争をなくすべきであるという議論を続けて来たにもかかわらず、戦争がなくなることを信じるものは誰もいなかった。識者の間では既に、軍事競争は、制空権の競争を意味することだと考え始められていたが、それからほんの僅かな年月しか経っていないのに、前回の戦争がそれを完全に証明したのである。その潜在的な能力を目の当たりにした国が、憂慮せざるを得ない非常に強くて新しい破壊力に対して、全体の意見を作り上げていくための国際的な発想の交換しない限り、今後ずっと我々を餌食にしようとする怪物が、我々の科学によって作り続けられていくのである。

国際連盟を支持する有名な識者が、つい先ごろ次のように述べている。「私は、国際連盟が、思い通りに権限を行使することが必要だとは思っ

ていない。どんな強い力でも、平和を破ろうとする力に對抗し続けることは不可能だからである。その力は報道機関を利用することである。潜在的な可能性を持ったすべての人々の行動によって、すべての人々がそれに反対しているという意見が形作られるからである。」

確かに、新しい破壊兵器が果てしなく広まっていきつつある世界中で、軍事行動や軍事展開全般について、嘘偽りのない新聞報道をすることは、いかなる条約を締結することよりも、我々を救う近道となるに違いない。世界中の化学者や技術者が、人類を救おうという友好的な精神を持って毎年会合を開いて、彼らが、政府が使おうとしている破壊兵器を完成するために研究開発することは犯罪であり、それによって金を稼ぐのは人類に対する裏切りに当たることを、共に合意すべきである。もし我々が、そのことに関して国際的な意見交換をすることが出来れば、その時始めて、我々は人類を救済する翼を羽ばたかせることが出来るのである。そのためには、一体どうすれば良いのかという質問に答えてみたい。

人類にとつての幸福や不幸、成長や衰退は、必ずしも政府の責任とはいえない。政府とは、国家として競い合うために、その競争を委任され

た者に過ぎない。新聞記者がひとたび精神的な偏見を抱くと、ずっとそれを抱きつづけるように、彼らの手に破壊兵器を委ねれば、それを委ねられた者は直ちにそれに興味を抱いて、使い続けるに違いない。未来の扉を開く現実の鍵は、破壊の手立てを準備しているような、これらの人々の手に渡されているのである。破壊兵器を作るといふこの問題に対して、彼らはアメリカ人、イギリス人、フランス人、ドイツ人、日本人、ロシア人である以前に、化学者、発明者、技術者という科学者ではないのだろうか。彼らは、自らの国や人類に対してもっと関心を払うべきではないだろうか。彼らの手の内にある人類の未来をどのようにすべきかについて、今初めて答えを出す時がやってきたのである。

現代科学の発明は、責任の及ぶ範囲が変わるほどの勢いで、めまぐるしい前進を続けている。現代は、従来とは比べものにならないほど、科学に依存しているのである。いや、科学だけでなく経済にもである。そこで更に、国際的な発想の交換がより重要になってくる。例えば、世界中の財政専門家たちが、単なる思い付きではなく堅実に活動するために、国際的な発想の交換を図れば、相互援助のきっかけを捉えるに当たって

難しい問題の重圧がかかったとしても、彼らの能力から考えれば、経済を永続的に改善する確実な方策を設定出来ることは間違いない。

このような提案に対して、頑固な人は、次のように答えるかも知れない。「そんなことが出来るはずはない。発明家も化学者も技術者も財政家もすべて、自分の生活を成り立たせる必要があるし、他の人たちと同じように、祖国を信じる立場にいななければならない。彼らの財産や、その財産を保証してくれる国家は、彼らに先ずそのことを要求しているのだから。」なるほど、それは、いい指摘である。しかし、もし、科学や財政を国際的に考えることを認めないとすれば、たぶん、何のためにもならないだけでなく、やって来るのがそんなに遠い将来ではないこの世の終わりを、もちろん完全に終わるわけではないにしろ、幻滅を感じながらただじっと待ち望んでいるということであって、飢饉と疾病にあえいでいる国の現況とまったく同じである。

安易な楽天主義に耽ったり、悲観的に物事を考えるのは容易いことであるが、この二つを上手に使い分けることは難しいことである。我々が持っている文明社会を改善したり、救ったりする機会が、まだ残されて

いるとすれば、この機会は、この数年間の間に、我々がどのくらい国際的な発想を交換出来るかに懸かっているのである。

国際的という言葉の一部には、社会主義あるいは共産主義という意味を含んでいる場合もあるが、ここで述べているのは、経済理論や階級制度や政治的目標を持って改革しようという意味ではない。我々を救うことが出来る、唯一の国際的な発想の交換とは、色々な国の政治家の間を、色々な国の弁護士や科学者や政治家や作家や実業家や専門職種の人たちとの間の考え方で交換することである。適切に機能していないとしても、国際連盟やハーグ国際裁判所には、政治家や弁護士のための意見交換の機能があるし、国際ロータリーには、実業家と専門職種の人たちが発想の交換をする機能がある。しかし、世界の将来に対するかなりの部分を託されている二つの分野の専門家である、発明家や化学者や技術者などの科学者と政治家たちは、現状では、国際的な発想を交換する機能を備えておらず、今彼らの双肩に懸かっている世界に対する責任を果たさうという考え方も備わっていない。もし彼らがその崇高な責任を実現出来たとすれば、世界を救うための戦いは、半ば勝利を収めたも同然である。

そこで、報道機関の役割が浮かび上がってくる。新聞記者は、地域社会に正直かつ公正に奉仕するロータリアンの理念に従っている実業家よりも、人類の未来に関して若干呑気過ぎる。全体的に見て、もし新聞が公正な記事を書き続けることから逸脱することなく、愛国心に訴えて特定の政党に数多くの恩恵を与えることを断り、爽やかな雰囲気でスポーツを楽しむように、活動を続けるのならば、新聞は、科学と財政に次いで一番目の威力を発揮するに違いない。もちろん現在でも、特別な例外を除いた、すべての国の大部分の報道機関は、これらのスポーツをしていくごく少数の仲間たちのように、己を律しながら、活動を続けているのである。

新聞は執筆家の大集団によって構成されているが、その大多数の人たちは、単に新聞社の構成員であるだけでなく、個人生活においても公明正大な高い見識を持った人たちばかりである。国際的、政治的に公明正大な立場に立った報道基準に改善することは、新聞を作っている個々の執筆家の責任であると、彼らが打明けた言葉を信じたい。さらに、このような改善は編集者やジャーナリストに国際的な発想を交換する習慣を

つけさせるだけではなく、別の視点に立った広い心で、彼らが自らで処理すべきことを、自らの良心に従って処理するように認めさせることでもある。要するに、彼ら全体が個人的に選択しなければならぬことは、国際的に摩擦を起こす原因になり兼ねないような不愉快な言葉を使わないということに尽きる。

我々は個人生活において、常に正義に徹していると一概に言うことは出来ないのに、なぜ新聞記者の生活は、正義に徹しなければならないのだろうか。なぜ個人の見解に捕らわれすぎて、適切な調査もしないで作り上げられる記事が、たびたび出るのだろうか。調査をしていない記事は、不適切なものとして拒絶すべきである。なぜ、反対の意見はしばしば黙殺されるのだろうか等々の、多くの問題をかかえている。新聞は偉大なる力を持ち、崇高な理想を掲げているし、多くの長所を備えており、多くの素晴らしい実績をあげている。しかし、どのような理由があつたとしても、公明正大な原則や真実から外れることは許されないのである。要するに、政府や一般大衆は責任を負うことを望んでいないのである。我々の運命は、現実に科学と財政と報道という三つの偉大なる力の手中

にあるといっても過言ではない。華やかな政治的な表舞台の水面下にある、これらの三つの偉大な力が、国家の進路を密かに決定しているのであって、彼らが国際的な交流を円滑に進めている限り、未来に僅かでも希望が持てるのである。これらの部門に従事している人たちの各自が、この言葉を強く噛み締め、かつ考える人でなければならぬ。世界の希望は彼らの双肩に懸かっているのである。人類に対して専門家としての信頼関係を築き上げることが出来る可能性を持った、科学と財政と報道の新しいこの三者の協力体制によって、広くあまねく人類に最善の奉仕をするためのモットーこそ、「すべて人にせられんと思うことは他人にもその通りにせよ」なのである。

国家はその集団の中に、決して加わろうとはしないし、お互いの考え方の共通点を見出すことも出来ないが、国内にいるこの分野の著名な専門家たちは、お互いに見解の一致を見るような素晴らしい機会を持っているのである。彼らは、お互いの技術と、生き生きとした見通しという共通の基盤を持っているのである。現在彼らをばらばらにしているものは、あまりにも狭い愛国心と、ざっくばらんに言えば金である。発明家

も財政家も新聞記者も生活がかかっている。そこで、皮肉屋はにやりと笑うに違いない。

科学者も財政家も新聞記者も、今はそのことを疑っているかも知れないが、事業と同じように、一攫千金のやり方よりも、正直と公明正大な態度で長続きさせる方が、多くの金が儲かるのであって、一般的な生活においても、破壊することよりは人類を救うことの方が得なのである。そして国際的な発想を自由に交換することが、人類が生き残れる現代国家の基本条件であることは、間違いない事実なのである。もしも人類がその道を選ばないか、不十分な選び方をすれば、アナトール・フランクス女史が語った、「生き残れる可能性は殆どない」という言葉が真実のものとなるに違いない。

ジョン・ゴールズワージー

編集者序文

私は、この時期に、「ロータリー解析」という表題の本を、腰を据えて書くつもりではなかったにもかかわらず、このような本が、今、この世に現れた理由は、抵抗しづらい圧力と、倒産の危機に瀕している事業のせいである。定義されていないことがらに対して、多くの善良なロータリアンからの訴えが、曖昧になったまままで簡単に片付けられていることから、ロータリーを定義する機が熟したと言われている。知りたいと思っている情報を要求する人たちの疑問を、簡単に退けることは、もはや不可能である。誰かが何かを話さなければならなかったのであって、そのためには、分かり易い文献を出す必要が生じてきたのである。

多くの人々が「ロータリー解析」についての本を書くことが可能なのであって、この本を書いた著者は、何年、その組織に在籍していたかとか、どんな活動をしてきたかというような資格について、文句をつけられるべきではないと思う。ことによると、このテーマに対する著者の造

詣の深さでは、本当はこの仕事をするのにふさわしくなかったのかも知れないし、もっと良い著者を選べば、新人たちの間に新鮮な考え方や魅力を作り出したかもしれない。この本をこのような形で作ったのは、ロータリーの教育を受けたいという身近な要望を満たす、きっかけに過ぎないのである。

6ヶ条からなるロータリーの綱領を冒頭に掲載したのは、その各々の条文やその全体を、日々の生活の中でどのように適用すべきかと、尋ねられることが多かったからである。皆はこの条文について、個人はどのようにして、自分の事業に奉仕の理念を適用すべきなのかとか、高い道徳基準とは本当は何を意味するのかとか、どのようにして社会生活に奉仕の理念を適用したらよいのかとか、他の意味と違った用語である、ロータリー的感觉の「親睦」という言葉の正確な意味は何かとか、奉仕の機会として個人個人の職業をどのようにして權威あるものにしたらよいのかとか、世界の平和を進めていこうという大きなプログラムを行うために、ロータリーの事業をどのようにすべきか等という、あれやこれやの問題を折に触れて議論することが出来るからである。

ロータリーの例会や地区大会のたびごとに、他の議題はさておいてこの問題を議論したとしても、その材料に尽きることはないだろう。議論をするには根拠が必要であるが、誰が彼らにそれを提供すればいいのだろうか。非常に勇敢な人か、その権限をほんの僅か備えている人だけかも知れない。私は、その重責を解決するために、その材料を卓話者に提供すべく、ロータリーの究極の目的の六つのテーマを設定することを、昨年の夏休みに引き受けた。このシリーズは、この解りやすい本を読めば、活動しようとする人なら誰でも、その要望がかなえられるように作られている。

この本に目を通すや否や、直ちに多くの反論を呼び、多くの議論や批判で騒がしくなることは、重々承知している。そのことは大歓迎であり、これも偏に、新しい考え方を提起しようとして奉仕した労働の見かえりとして、満足するものである。現在は、古い考え方に基づいたやり方では、もはや通用しない時代である。ロータリーは新しい考え方を持ち、ロータリアンは自らの組織の外に飛び出してその使命を果たすべきではないだろうか。私はこの本を読んでもらうことを切に希望するものである。

る。例えどんなにお粗末で、不完全なものであろうとも、新しい考え方と行動の分野に通じる道に向かって、皆が動いているという感覚を、少なくとも読者に持ってもらいたいからである。

ロータリーの綱領

ロータリーの綱領は次の事項を奨励かつ育成するにある

1. すべての尊ぶべき事業の基礎として奉仕の理想
2. 実業および専門職業の道徳的基準を高めること
3. ロータリアンすべてがその個人、職業生活および社会生活に常に奉仕の理想を適用すること
4. 奉仕の機会として知り合いを広めること
5. あらゆる有用な職業は尊重されるべきであるという認識を深めること、そしてロータリアン各自が職業を通じて社会に奉仕するためにその職業を品位あらしめること
6. ロータリーの奉仕の理想に結ばれた実業人と専門職業人の世界的親交によって、理解、親善と国際間の平和を増進すること。

第1章 奉仕理念

ロータリー活動における究極の目的の第一は、「すべての尊ぶべき事業の基礎として、奉仕の理想」を奨励し育成することであるが、ロータリーそのものには、これを要求することは不可能であり、現実に、その真意が何であるかを述べることも難しい。多くの人たちは、それが黄金律からきたものであると説明しているが、数年前に、ロータリーの国際大会の講演者は、演説の中で、この黄金律の様々な表現方法について次のように解説している。

エジプト人は、「他人のために良かれと自らが望んだことを捜し求め、それをしてあげなさい」と表現している。

ペルシャ人は、「あなたが人からしてもらいたいことを、人にしてあげなさい」と言っている。

仏陀は、「他人の幸せを、自ら望んで捜し求めなさい」と述べている。中国の哲学者は、「あなた自身が望まないことを、他人にしてはならな

い」と言っている。

モハメットは、「あなたがしてもらいたくないような方法で、あなたの兄弟たちを扱ってはならない」と命じている。

ギリシヤ人は、「隣人から敵意を抱かせるようなことをしてはならない」と助言している。

ローマ人は、「すべての人が心に刻み込んでおかなければならない法律とは、あなた自身の社会の人たちを愛することである」と書いている。

モーゼの律法には、「あなたが隣人からしてもらいたくないことを、隣人にしてはならない」と書かれており、これだけが唯一の戒であって、その他のものは単なる解説に過ぎない。

そして最後に、ナザレのイエスは、「すべて人にせられんと思うことは、他人にもその通りにせよ」と勧めている。

このように、奉仕理念は人間の思考と同じくらい古いものである。例え、宗教の教えと哲学の理論との差があったとしても、隣人に対して己を捧げることが道徳上の義務であり、人生のすべての部門でそれを適用することを、全体として説いたものであることには間違いない。

ロータリーの新しい歩みとは

典型的なロータリアンに奉仕理念という表現を説明するに当たって、ロータリーはどんなやり方を要求しているのだろうか。この質問にうまく答えることが、たぶん、ロータリーの教育の最初の義務を果たすことであり、そのためには、この活動の歴史の概略を学ぶことから始めなければならぬだろう。

ロータリーは、ごく普通の人間に過ぎないシカゴの弁護士、ポール・ハリスの考えから作り出されたものであって、クラブが探し出そうとしている会員は、個人としてお互いに知り合いを深めるだけではなく、彼らの様々な職業を信奉する者でなければならない。クラブがあらゆる種類の実業家の適切な代表者を確保するために、その会員身分は、与えられた職業分類から一人の代表者に制限されており、元々の例会はロータリーという名前の通りに、異なった場所にある会員たちの事業所を巡りながら開催されていた。このような方法によって、個々の人たちは、他の人たちの事業について知識を深めるようになったのである。毎週の昼

食会で話し合う目的は、元来は、各々の事業か、事業全般に関係することを学ぶことに制限されていた。ロータリークラブはシカゴ以外の他の中心都市にも、同じように作られたが、何年もの間、増えていくロータリアンの義務としての哲学や信条の本体となるロータリーの理念はまったくなかった。

その概念は、1911年のポートランド大会に先がけて指名された委員会が、僅か二行からなるロータリー宣言として知られるものを考え出して、提案するという活動から、発展していったものである。

「奉仕こそ、すべての事業の基礎である」

Service is the basis of all business]

「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」

He profits most who serves best]

その時点から前進が始まった。ロータリーは素晴らしいスローガンを持ち、個々のロータリアンは、会員として入会する前提として、少なくとも、利己的な考え方をする以前に、事業を通じて奉仕をするという原則に立たなければならぬことを理解することが期待されているのである。

る。

ロータリーが奉仕の理念を取り入れた起源を手短に述べようとするれば、その考え方を解説しようとする者は、ロータリアンの **I serve** という信条は、初めてプリンス・オブ・ウエールズがクレシーの戦場に赴いた時に、**Ich Dien**、と言ったことに端を発する、戦場における日々の生活の中から生まれた言葉であるという事実を強調しなくてはならないだろう。ロータリアンが提唱する奉仕とは、個人の職業において奉仕することである。ロータリアンは、奉仕の理念を受け入れて、自らの事業にそれを適用しなければならぬ。ロータリークラブとは、選ばれた実業および専門職種の人たちによって構成されているクラブであり、各々の会員は、自らの考えや方法や条件に従った自らのやり方で、職業を通じて奉仕の理念を実践に移さなければならぬのである。

理念と理想家の真の姿

この章において、奉仕の理念を適用する意義や方法を述べるだけでは

なく、我々の日々の生活の中で要求されることがらという立場から、理念そのものについて注目してみたいと思う。

「理想主義」は、その言葉が誤って使われていることによって、最近の社会では誤解されて使われる傾向が強い。現実には起こり得ないことがらを夢見て、現実の世界の生活や生計を危険に晒す恐れのある「理想家」は、現実的の考え方にそぐわない人のように言われている。奉仕の理念を事業の基礎にすることは、理想主義に懐疑的なすべての人たちから嘲笑されてきた。理念によって、我々が意図していることは何かを正確に示し、さらに奉仕の理念は、単なる決意や目標ではなく、ロータリーが要求している「すべての世の中の有用な事業の基礎」でなければならぬことを正確に示すことによって、我々の精神をはっきり表明する必要がある。

理念というものは、絶対的な基準となるものでなければならぬ。人間の心の中には、高い志を持って行動したいという意思が宿っている。ずっと昔から、人種や部族を問わず、すべての人類は常に理念を抱いてきた。理念は哲学的には、善、真、美という三つの主要なカテゴリー

に分類されて、これらの三つのそれぞれが、さらに善行、真実、美しさというカテゴリーに細分化されている。理想家という言葉の本来の考え方は、その人の品行も信念も風格も、善、真、美という確固たる信念、あるいはこれら三つのものが一体となった信念によつて律されていることである。冒頭に我々が述べたように、奉仕の理念とは、隣人愛の精神を受け入れることを基本にして、究極の動機として、個人個人が、私たちの仲間のために善かれと思うことなら何でも引き受けることを、現実の生活の中に適用することである。「すべての世の中の有用な事業の基礎としての奉仕の理念」とは、たとえそれが、自分自身の利益に結びつかなくても、他人のためになることを、究極の目標にした考え方で、自分の事業に邁進しなければならないことを意味するのである。

今我々は、この世の中に存在するみんなにとつて、一番大切なことは何かを考えなければならぬ。みんなにとつて大切なこととは、我々自身を取り巻く各々の環境の中から、我々が見つけ出すことが出来ることである。それが例えどんなものであるとしても、確実な条件は見つけられるはずである。全体の生活は、各々が行う奉仕を、他の人たちが行

う奉仕と交換することによる恩恵で補うことが出来る。世界の国々は未だ、すべての人が利己のためではなく、奉仕のために働くという判断に基づいて、個人個人が奉仕を行う状況には至っていない。多分、そのよ
うな理想郷は、この地球上には永遠に出来ないかも知れない。現実には、時代の進歩によって、すべての地域社会において、非常に多くの人々が、利己のためよりも奉仕のために多く活動し、全体の人々の関心のある事を、昔よりもずっと多くしなければならぬだろう。しかしながら、大部分の奉仕は、利益をあげてを基本にした個人個人の実業家によって実行し続けられているのである。

現実の事業に携わってきた人たちは、人間は生き永らえなければならぬことを、ずっと言い続けて来たし、経済の法則に従って、商品を市場で最低の価格で買って、最高の価格で売らなければならないのである。仕事を始めるに当たっては、太陽が照っている間に干し草を作らなければならぬし、取り引きにおいては法律と道徳で許されている事業を通じて、最大限の成功を収めなければならないのである。

職業分類は何を意味するのか

ロータリーが、奉仕という隠された動機のために、法律や慣習に従った適正で直接的な利益を、敢えて犠牲にしなければならぬような、個々の実業家に課している義務とは何であろうか。この質問に答えるに当たって、どんな種類の奉仕が提供出来るのか、地域社会全体に対して物品やその他の方法でどの程度の奉仕が出来るのが正確にわかるロータリーの職業分類大分類表を見れば、この問題を解決出来る可能性があることを述べておきたい。

例えば、人間の生命に欠かすことの出来ないものを供給する、農業、食料、飲料、衣類、住居、家具、暖房、照明、換気、医療、交通などの奉仕分野を見つけることが出来る。人間は食べたり飲んだりしなければならぬし、家に住んだり衣服を着たり動いたり健康を保ったりしなければならぬので、これらのすべての分野において、人々が必要とするものを提供するために行う事業が、奉仕の第一歩と言えよう。

そこで、最初に提供されたこれらの活動に役立つ奉仕だけでは、生き

生きとした生活が望めない場合に、ビジネス・サービス、経理事務、銀行、保険、教育、外食産業、美術、事務用品、印刷、出版、広告、娯楽等というサービスが必要となってくるし、それに次いで、豪華な楽しみとも言える高級品や豪華な食料品や娯楽や趣味を提供するというサービスが存在する。さらに、学校、法律、科学、芸術、行政などという組織社会や施設によるサービスがある。ほとんどすべての事業や専門職種の人たちは、これらの数々のカテゴリーの中に属しており、最初の段階かやや進んだ段階が必要かどうかは別にして、実際の臨床医のように自ら納得した上で、自分の職業に適用しなければならぬ奉仕理念について、学ぶことが出来るのである。

その人に備えられている最大限の能力で奉仕を実践し、緊急事態において提起される問題、例えば大戦に際して家に留まるべきか、志願すべきかなどということを除けば、何も悩む必要はないのである。例えば、全国的なストライキがあっても、これらの基本的な品物の確保に応えられるような協定を定めておいて、例え理事会からの要請がなくても、これらの品物を確保しておかなければならないことは当然である。個人個

人は自分が提供出来るサービスの種別を熟知すると同時に、緊急事態に当たっては、普段の業務を止めてでも、最善を尽くして、そのサービスを提供しなければならぬのである。

公共福祉への関心

今我々は、事業または専門職種に携わる個人の立場から、どのようなにすれば、今まで自らの分野で果たしてきた奉仕よりも、さらに素晴らしき奉仕が提供出来るのかを捜し求めなければならない。自らの職業に立脚したロータリアンとして、もしその職業に「罪」があるとするならば、その罪を生涯、双肩に負っていかなければならないのである。もしロータリーにおいて、一部の実業家や専門職業人が軽蔑を受けるようなことがあれば、その代表者として、その立場を防衛するか、欠点を改めなければならぬし、もしもよい評価を得ているのなら、その時は、貢献に値する評価を得たことになるのである。

どのようなにすれば、必需品を作ったり供給する上で、より素晴らしい

サービスが提供出来るのだろうか。もし経済情勢が順調ならば、事業の繁栄こそが、商品やサービスの質を高める絶好の機会となるというのが、実業人からの極く一般的な返答である。

もしも、社会や経済情勢を良くしようとして、事業に成功した多くの事業家を探したのに、そのような事業家が見つけれなかったとしても、この方法以外に取るべき道を見つけることは、殆ど不可能に近いのではないだろうか。

大多数の実業家たちの共通の関心は、公共福祉である。奉仕の理念を掲げている実業家や専門職種の人たちの組織は、すべて、自分たちの商売が成功するために、よい社会情勢になることを望んでいるし、もし彼らがそれを達成出来れば、よりよいサービスを提供するために利用することが出来るのである。一般的な実業家の立場から見れば、物品や機会の提供を制限しなければならぬような社会状況は、間違つたものであり、それが改善されることを望んでいるのである。実業家たちは、健康に恵まれ、分別ある考えを持ち、おいしいものを食べ、自由と繁栄と幸福な生活を望んでいるのである。彼らは、奉仕の理念を推進力として、

自らの職業に全力を傾注することによって、この素晴らしいことが達成出来ることに気づいたのである。

しかし良い社会条件よりも、貧困や疾病や腐敗や紛争や虚栄や愚行や悪などの悪い社会条件の方が、多くの利益を得る立場にあるとして、自らこの道を捜し求める実業家や専門職種の人たちが皆無であると、言いきれるだろうか。高利貸しは貧乏と浪費によって、いかさま医者は病気によって、軍需産業は戦争によって、安物を売りつける宝石商や見掛け倒しの商品を作る者は虚栄によって、悪徳弁護士は愚行によって、ポルノ業者は性的不道徳によって、酒の密売業者は不法飲酒によって、のみ屋は賭けごとによって、扇情的な出版業者は心の弱さと満ち足りぬ欲望というような需要によって利益を得ているのである。これらの事業に携わっている一人一人の人たちは、道徳的な人であり、自分たちの仲間を傷つけようとは思っていないだろう。しかし、商売は商売であって、一定の物を要求する人がいる限り、習慣に従って、彼らが望んでいるものを供給しなければならぬ。もし誰かがそれを断ったとしても、別の人がそれを提供するだけである。

そのような願いに応えるために、ロータリーは、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という格言を示しているのである。事業における真の成功は、真実の奉仕によって為し得ることは自明の理であり、好ましからざる職業から、世のためになる職業に転換しようとする商人は、法律によつて補償してもらはう権利があることに気づいてもらおうとして、提案されたものである。すべての悪しきことには、これに一致した善きことがあり、道徳的な感じだけではなく物質的にも、善きことの方が悪しきことよりも、より多くの満足感に浸れることは、経験がこれを証明しているのである。

歴史上の偉大な事業の成功者のほとんどは、人間性の善意に基づいたよりよいサービスを提供しようとして、自ら喜んでその機会を捉えたり、それを作り出したことが、その出発点なのである。自動車、新聞、洗剤、健康食品や飲料、健全な文学、芸術作品や音楽、省力化機器、保養地やその他のあらゆる成功した分野における努力について考えれば、我々はその発端となった、奉仕の理想を目指した理想主義者の存在を見ることが出来るのである。

ロータリーの使命

奉仕の機会が大きいか小さいかにかかわらず、それぞれの人が自分の最善を尽くして職務を全うするように、あらゆる種類の実業や専門職種の人たちの間に、その理念を伝えることがロータリーの使命である。職業分類を貸与されたロータリークラブの会員は、常に新鮮で、暖かい心と品位を持って生活しようという信念を持ち続けなければならない。ロータリーが、一人一業種制度によって構成されているという独特な方法について、世間の目を正當に評価させることが出来る最もよい方法の一つは、クラブ例会において、いかに自らが持っている特有な職業によって、地域社会に奉仕出来るか、その結果どのように改善出来るかを示す機会を、個人個人の会員に数多く与えることである。すべてのロータリアンは、自らが持っている特有な職業に対する要望についての理念の提唱者になることによって、世間で注目を浴びているロータリーのために、「すべての世の中の有用な事業の基礎」を現実に適用するために、「奉仕の理念」を基本にして修練を積む教育機関としての独特な位置付けを証

明することが出来るのである。

第2章 職業上の奉仕

「事業および専門職務の高い道徳的基準を鼓吹しこれを育成すること」は、ロータリーの二番目の設定目標であり、最初の設定目標は、「すべての尊ぶべき事業の基礎として奉仕の理想を鼓吹し育成すること」である。もし最初の目標が首尾よく達成され、同じよう二番目の目標が達成されたとしても、隣人に対して本当に奉仕をする基準が達成されたわけではないと、批評家は論争を挑んでくるかもしれない。なぜ黄金律は、十戒に取って代れなかったかと、批評家は尋ねるかもしれない。

プログラムの非常に重要な項目として、彼らを勇気づける業績の記録の一端として「事業と専門職種の道徳的基準」を採用しているという事実を、少なくとも我々自身が知っているという名誉を、ロータリーは我々にもたらしたのである。

ロータリー道德律の起源

ロータリーが既に会員対して要望している、「公正な取引」「正直で効果的な奉仕」「同僚に対するおもいやり」などを公式化したロータリー道德律を盛り込んだロータリー宣言の最後に、「最もよく奉仕する者、最もよく報いられる」という標語が採用されている。この道德律は十一条から成り立っており、自分の職業を道德的に営んでいくためのロータリアン個人個人の義務を述べたものである。道德律に従って事業の成功を夢見るロータリアンは、最高の正義と道德に基づかない成功などは、まったく望んでいないし、他の人たちに公正な取引の実例を示すために、すべての関係者が取引によって利益を得ることを望んでいるのである。

ロータリー宣言が採択されてから一年後に、どうすれば事業を道德的に営むことが実行出来るのかを、もつと正確に定義づけてもらいたいという要望の高まりに応えて、高い道德的基準を厳守するように、ロータリークラブ役員と委員会が個々のロータリアンを激励する責任を負っていることを示す一つのプログラムが、国際ロータリーから提案された。

既に他の事業や専門職種の団体に入っていたり、これから入ろうとしているロータリアンは、個人的な影響や活動が、地域社会により大きな価値を与えることに、大きな喜びを感じていた。アメリカにおけるその種の団体は、企業の経営基準を全体的に高めるために、彼らが利用する目的で存在しているのだという潜在的な要望を受けて、今世紀の間に素晴らしく偉大な組織に成長していった。この種の団体は、他の業者との間の無駄な競争を止めて、その代わりに、遠く広くまで協力的体制を広げていこうという考えを持っており、彼らはよりよい取引方法を標準化し、多くの不正な慣習を取り除くと共に、取引の中に、積極的に奉仕の理念を設定していった。

もちろん、商取引におけるこの全体的な向上によって信用を高めることについて、他の団体の活動以上のものをロータリーが要請されているわけではなかったが、ロータリアンが主導的立場をとった結果として、工業や商業の多くの職業の人たちが導入した道德律が作られた。現在、約300にも上る業種の道德律が存在し、の道德律は職業を通じて地域社会に提供すべき奉仕の本質に関する一般概念を示した最初の声明である

と共に、遵守すべき行為の基本条件を設定したものである。

1923年に国際ロータリー会長を勤めたガイ・ガンディカーによって作られた、レストラン協会の道徳律を、その他の業界が作った道徳律の一例として紹介してみたい。

1. 雇用者と従業員の関係
2. 購入すべき品物を作っている業者との関係
3. 事業家同士の関係
4. お互いに関連する職業における事業家の関係
5. 一般社会や行政と事業家の関係
6. 消費者や顧客と事業家との関係

これは事業上の様々な関係について定義したものであり、これらの表題の下における道徳的義務を設定したものである。

事業における倫理昂揚運動の一般的効果は、ハーブ奏者ハーマンズの

著書 **THE ETHICS OF BUSINESS** (1926年発行) の中で、「組

織は孤立に取って代わり、協力は競争を和らげるようになってきた。やり方の変化は、事業家の態度と心に大変革をもたらした。」と述べている。彼はさらに、「以前は、生きるか死ぬかの競争をすることが定めであり、事業はジャングルさながらであった。競争相手はすべて、お互いに相手を疑い、避けなければならぬ敵であった。」と書いている。事業上のライバルと戦うために、あらゆる手段が使われ、激しい競争は、粗悪品、労働意欲の欠如、品質の低下などの結果を招いた。商品の価格は、適切ればいくらでも安くなるものという現象を引き起こした。商人は、適正な方法、裏ルートを問わず手に入った商品に対して値段をつけたが、どの店も、他の店が幾らで売っているかを知らなかった。売り手は顧客に対して一方的な値づけをすることが出来た。結局、この無駄で馬鹿馬鹿しいやり方を押し付けられた一般大衆が、無秩序な商売の世界のつじを払わされたのである。

もしロータリーが、そのような種類の実業界の改革に、例え僅かでも貢献することが出来れば、実業家の活動によって達成出来るはずはないと嘲笑している批評家の鼻をあかすことが出来るに違いない。

「無秩序な商売」や「ジャングル」のようなものが存在していない古い伝統をもった国では、革命を起こす必要などまったくないということが言える。そのような国における事業は、新しいことをどんどん取り入れて、処女地を開拓すればよく、市場の微妙な問題に注意を払う必要もないほど安定したものである。事業は、主として、父から息子に引き継がれるといった世襲制度によって継続されてきたし、ロータリーが黄金律を持ち出して説教するよりずっと昔から、善意は事業を営む上で欠かすことの出来ないものだということが認識されていた。正直と公正な取引の伝統は、時代を超えて受け継がれ、正直と公正という言葉は産業界の少なからざる部分で、人々の心の中に定着していた。

商道德の違反については、いくつかの国では、未だ立法化されていない法律の問題であるが、はっきり法制化されていないとしても、一般の世の中の人に軽蔑されている慣習である。これに当てはまるようなことからはすべて、まさしく、職業上の道徳律の考え方に反するものであつて、ロータリーの綱領の第12条の基本原則の域にはほど遠いことを意味している。道徳律のやり方を個人的に評価し、それを見習おうとしてい

る人たちに大きな影響を与える立場にあるロータリアンとしての実業家は、とりわけ注目を浴びる存在である。もしそのやり方が道徳的水準や効率を共に下げような結果を招いて、社会的に不完全なものならば、事業家という存在は、自らの生き方をさも真面目そうにごまかしているに過ぎないと思われるに違いない。

ロータリーは、自分がやっていることが非常に重要なことであるということを、当人に自覚させなければならぬ。利益のみを追求する商人の利己的な心から発される、「濡れ手に粟」と言う根性は、糾弾されなければならぬのである。道徳律の「自分の職業は価値あるものであり、社会に奉仕する絶好の機会を与えられたものと考えること」という一節が、これを如実に物語っている。一般の人たちはそれを自覚せずに、必要に応じてその立場をとっているに過ぎないが、ロータリアンともなれば、自らの職業が価値あることを認識する必要があることを意味すると共に、そのことを認識すること自体が大きな価値を持つのである。道徳律のこの最初の条項によって、すべてのことがらが規制されているのである。各自が自らの職業の価値を認めて、自らの道徳的水準を充分高め

るようにしなければならない。ロータリアンは世界中に目を向けて、例えどんなことであろうとも、社会問題に対処していかうという活動を通じて奉仕することが、価値ある機会だという考え方を持って、みんなが活動していると言えよう。

もしも、地域社会で重要な地位を占めている実業家が、労使共々結束して、自らの職業の価値を認めようとしなかったり、その重要性を間違つて認識しているような、基本的な問題が起こったときには、どのように対処したらよいのだろうか。ロータリアンは、生産者と消費者の関係以上に、労使関係を処理するに際して、道德律のこの条項を重視しなければならぬし、産業界の問題を解決するに際して、他のことがら以上に、綱領第2条を適用する必要があるのである。

道德律の論拠

ガンデイカーの道德律は、雇用関係を調整するための法律とか、労働組合による同意とか、雇用者の自身の発案とかいうような、遵守しなけ

ればならない数多くの条項の中で、国内において最もしつかりした見解を持ち、分かりやすい言葉で書かれた、善良な経営者の義務を規定した条項である。この条項は、従来からずっと、経営者の義務として心に刻み込んで守ってきた、経営者と従業員との間の心の通い合った協力関係によつて、自分の事業が成り立っていることを、経営者に思い起こさせるために価値があるのである。

イギリス人の考え方としては、他の実業家との関係について成文化しようという考え方には反対であるが、道徳律を根底に置くという原則について話し合うことには、まったく異存はない。ここで述べようとしている事業の有用性と真の成功は、うまく定義されており、世の中に広く示されている確固たる指導上の原則につながっているからである。再び、ハーマンズの言葉を引用してみたい。

「はつきりと明文化された規範は、正直で公明正大な心を育み、誤解を取り除き、事業上の障害を減らし、価格を引き下げていく。産業界におけるすべての事業所は、同じ基盤に立って競争している。ずっと前から倫理基準を与えられていた医師や弁護士と同じように、実業家は、職

業人としての自尊心と誇りを高め始めたのである。」

「道德律は、同業者組合が、その会員たちを社会的な勝者にし、自らを出世させる方法である。」

「強く期待される道德は、個人よりもむしろ団体で始めるべきである。どんな人でも、道德がない場所で生きていくことは出来ない。」

「現代の実業界の競争などは、まだ幼稚なものである。集団の倫理は暗黙の了解の下に作られるものである。」

「古くからある職業では、その会員たちに負わされた社会的な影響力がもたらしたものととして、道德律が長い間使われ続けてきた。」

「道德律とは道德を新たに作るのではなく、それを表明することである。」

事業上のスローガン

「確固たる原則」の現実的な例を引用してみたい。

ニューヨークの服地商、アレキサンダー・スチュワートは、定価販売、

貸し売りお断り、現金仕入れと現金販売、商売の上で絶対的な真実を貫くという方針によって、自分の事業の成功を実現した。

ジョン・ワナメーカーは、「商品の返却と返金」や「顧客のことを第一に考える」という方針を堅持して、これに続いた。

宝石商組合は、「みんなが同じ値段を守ることが、もつとも重要なことである」「顧客を満足させる」「自分が買い手になったつもりで、顧客に勧める」「すべての信用は、一つの宝石に託されている」と宣言している。

ガンディカーの道徳律は、食品の検査、代用品を使わない規格化された献立、不当表示や過大広告の廃止、定価販売、礼儀正しき、注意深さ、チップをくれる客だけを選び好みしない、間違った説明をしないことなどという、他の多くのことがらを通じて、事業所を秩序と魅力のあるものにする力を備えていた。

農機具の販売業者は、「礼儀正しきは、新しい顧客も古くから続いている顧客を歓迎する時にも、常に分け隔てなく配慮しなければならぬ」ことを認めていた。

アイスクリーム販売業者は、「きつと彼がそれを使って代金を払ってく

れるだろうという希望を持って、買い手に、注文していない商品を送りつけること」を禁じた。

広告宣伝組合は、革命的とも言える提案に従って、彼らのスローガンを「広告における真実」とした。事実我々は、事業を成功に導くために真実とは程遠いスローガンが、かつて作られたことを憶えている。

塗装業界は、奉仕を約束する内容の取引スローガンによって、数百万ドルにまでその事業を拡大した。彼らは、「表面的なことを儉約すれば、すべてが儉約出来る」と宣言し、商売だけではなく奉仕にも意識的に関心を持つ必要性があることを喚起した。

葬祭業は、もの悲しい控えめな態度が実を結び、さらに公共の利益のための奉仕として、大胆にも日の当たる場所に浮かび上がってきた。その他のあまり尊敬を受けていない商売の一つであるクリーニング屋は、洗濯屋としての心構えを認識し、清潔にするというサービスを通じて一般大衆に認められた。

タクシー業界は、「礼儀正しく正直で安全」というスローガンで組織的なサービスを実行しただけではなく、々のタクシー所有者の関心も徐々

に改善されて、今や、正規の運賃以上の料金を強要される乗り物ではなくなつた。多くの弊害を撒き散らした映画産業は、特定のプロダクションと俳優によつて悪い組織が形作られていたが、一〇〇万ドル近い金を投じて、好ましくないプロダクションを一掃し、一般に公開する前に、毎週、その内容を検討するための広報委員会が設けられた。

新聞社は、誤つた主張による誤解から広告主を守るために、会社内に「監査局」を設けた。業界紙は、誇大宣伝や有料の誇大記事を掲載することを断ると共に、ニュース欄に個人的な意見を述べることを禁止することを決定した。定期刊行物の出版社は、疑わしい性格をもつた事業を受け入れないという道徳的な義務を打ち立てた。

新しい実業界

今述べたようなことは、道徳律の効果を示す僅かばかりの実例であり、事業上のモラルや取引方法に関する不動の原則に過ぎないものであるが、ロータリーが、新しい実業界と古い実業界との間で均衡を保つていこう

という要望に対して努力したことで、少なからず役立ったのではないだろうか。国内外において要求されている商道德の一般的な基準をすべて認めようとすれば、業界組織の中で最も誠実でなければならぬ我々としては、もっと積極的な道徳観や、奉仕に対するより大きな情熱を注ぐ必要があるのではないだろうか。

悪は暖かい心が不足しているだけでなく、考え方が不足していることよって跋扈する。現状に甘んじていたり、僅かばかり抵抗しただけで体制に流されたり、我々が売っているものが気に入らなければ、顧客はよそへ行ったらいいいいって怠惰を決め込んだ古い時代の実業家の間違いだけだとは言いきれないのである。ある国で道徳を高める必要を感じたとしても、他の国ではその必要をまったく感じていないかもしれない。

そこで、職業の中に高い道徳水準を持続したいと考えているロータリアンに対する助言は、自らの取引や様々な取引関係の条件を研究することと、同業者組合の会員として、職業人として地域社会に寄与しなければならぬ奉仕の一般的な考え方を高めることに、全力を傾注することである。ロータリアンは、自らの職業分類を代表するためにロータリー

に入っている。ロータリアンの義務は、単に利益を追求することではなく、事業の遂行に当って道徳的原則と奉仕の理念を適用するために職業分類を代表しているのである。

第3章 社会奉仕

「個人、職業および社会生活に奉仕の理念を適用すること」

ロータリーの綱領の第3条であるこの条文は、すべてこの一節を成り立たせるために、全体の目的が語られたり書かれたりしたものかも知れない。もし、奉仕の理念を、自らの個人、職業および社会生活に適用する人がいれば、その人は、真のキリスト教徒、真の国民、真の紳士だと言ふことが出来ると共に、真のロータリアンでもある。

前章で取り上げたように、個人および職業生活とは別次元である社会生活に奉仕の理念を適用することは、会員自身の問題である。それについて書かれているすべての文献には、ロータリーの重要な目的は、自らの職業において、個人個人を律するように配慮することであって、例えどんなに熱望されているものであっても、ロータリークラブによる活動は二次的なものに過ぎないという事実が強調されている。

個人および職業生活とは異なる社会生活とは、正確には何を意味する

のだろうか。個人生活とは、内輪の生活とか一身上の生活とか家族との生活や社交的な生活を意味し、職業に基づく生活とは職業生活を意味し、町や都市や地区や郡や県や州や国を構成し、国家における社会や国民や団体などの世界全体の社会を構成する一員としての市民の生活が、社会生活を意味していることを指摘しておきたい。

ロータリーは、各人が奉仕の理念を自らの社会生活に適用するように定めている。このことは、ロータリアンが国民の一人として、単なる受身の立場ではなく、市民として更に多くの役割を果たさなければならぬことを意味しているのである。

ロータリアンは社会に奉仕する理念を持っているが、その理念はロータリアンだけに特有なものではない。いろいろな方法で社会に奉仕したという願望は、あらゆる年代の人たちを駆り立てて、兵士、役人、出版社、政治家、公務員、福祉担当者、慈善家はもちろん、専門職種や事業に携わる人々や、科学、芸術、文学、演劇、学校、大学、公共機関の人々の間にさえも、社会に奉仕しなければならないという考えが広がっている。「社会奉仕」という言葉の概念の中には、人間が努力しなければ

ならないすべての分野の奉仕が含まれるはずであり、ロータリーが理解しているすべての奉仕は、社会奉仕の中に含まれるはずである。

ロータリーの為すべきこと

そこで、ロータリアンとして、ロータリアンの社会奉仕の概念は何かという疑問が浮かび上がってくる。自分がロータリアンであるという事実は、自分が社会奉仕の考え方を持っていることを表明していると言わなければならない。ロータリークラブは、公に確固たる目標を掲げた公共の組織である。その会員になることによつて、ロータリアンは進んで奉仕の実践を行う。もしロータリアンが進んで奉仕をしなければ、ロータリーはもちろんのこと他の組織からも敬遠されるに違いない。社会奉仕を誓約した組織の会員であるロータリアンとして、特にどんなことをしなければならぬのだろうか。団体としての心構えを發揮しなければならぬ団体奉仕活動の幾つかを示してみたい。

我々は、地域社会のグループの人たちがしている、またすることが出

来る数々のことから注目しなければならぬ。そのようなグループは数多く存在しているのである。全国的または国際的な目標を設定している中央の組織とは別に、すべての町には、政治団体、社会福祉団体、宗教団体、同業者組合、慈善団体、友愛団体などの独特の理念や関心を表明して、純粋に地域の目的のために活動している数々のグループが存在しており、彼らの主な目的は、彼ら自身の理念を表明すると共に、彼らに関心を持った機関を援助することである。

ロータリークラブは、政治や宗教にとらわれない組織の一つであるが、一般大衆に対しては、その活動内容についての特別な宣伝を全く行っていない。本来、いや二義的にも、慈善を行うために設立された団体ではなく、まず第一に自らの職業において奉仕をすることであり、次いで、クラブが、会員の投票によって引き受けることを決定した活動について、個人個人が奉仕することである。

実際のな社会奉仕を引き受けることは、ロータリーの義務なのだろうか。その回答は、個人として行う奉仕活動と同じように、クラブが一体となって奉仕活動をすることが期待されているので、当然のこととして

クラブの決定に従うべきであろう。

次いで、「我々はどのようなようにして役立つことが出来るのか」という疑問に答えてみたい。

目的を持った活動の選択

目的を持った活動の選択は、ロータリーとしての地域的な条件や、地域社会を代表する会員の目的などの特殊条件によって大きく左右され、その目的の選択は、多かれ少なかれ、各々の会員が関わりを持っている活動によって広がっていかなければならない。社会奉仕に関するロータリーの公式な方針は、国際ロータリーの決議34で定義されている通り、ロータリーの諸活動は如何なる既存の団体の活動と重複したり競合してはならないが、その目的を達成するには不十分だと思われるものに対しては協力することが望ましいと述べられている。

ロータリークラブにとつては、新しい組織を創立することより、既存の組織を改善する方が好ましいとされており、ロータリーが新しい組織

の創設を引き受ける場合は、関心を抱いている他の組織の協力が得られるように努力し、ロータリー自身が直接的な榮譽を求めるところを避けるべきである。ロータリークラブが奉仕活動をする目的は、会員に奉仕を学ばせる実験室として計画されたものと解釈すべきであることを付け加えておきたい。

社会奉仕活動を進めていく上で、自発的な行動に待ったをかけるべきではないという公式な見解を表明している人たちもいる。窓を「WINDY」で綴る少年に対する教育として、ワックフオード・スクエアのやり方を好む情熱家たちは「あそこに壊れたものがある。行つて治そう。」と大声で叫ぶ。町の少年たちは海岸に遠足に行きたがつているのである。ロータリーはそういった組織を作ることが出来るのに、なぜそうしないのだろうか。傷痕軍人には楽しいクリスマス会が必要なのに、なぜロータリーはそれを実行しないのだろうか。地域の病院には資金が必要である。なぜロータリーはそれを調達しようとしなのだろうか。子供たちには遊び場が是非とも必要である。なぜロータリーはそれを提供出来ないのだろうか。町に観光客や買い物をする人を惹きつけるため

に、広報が必要である。なぜロータリーは、それをやり始める方法を探し出そうとしないのだろうか。田舎の景勝地が、建築業者によって破壊される危険性がある。なぜロータリーは、それを保存するように世論を喚起することが出来ないのだろうか。地区の身体障害児たちを世話する組織がないのに、なぜロータリーは組織を結成しようとするのだろうか。質の高い演劇を上演するために相応しい場所がないのに、なぜロータリーはそれを上演出来る劇場を計画しないのだろうか。町には失業者が溢れているのに、なぜロータリーは特別な事態に対処出来る専門委員会を作ってこれを助けようとするのだろうか。町の慈善団体は無秩序なのに、なぜロータリーは秩序を回復するように努力しないのだろうか。

これらの事例や他の多くの事例は、時に触れて起ってくる現実的な提案である。これらの事例の各々は、決議34によって導き出された回答によってその主旨を拒否されたにもかかわらず、熱心な人たちによって提案され推し進められていったのである。彼らは、この決議は哲学を述べたものとしてまったく素晴らしいものであることを強調するが、時と場合によっては、哲学に期待をかけることが不可能な場合もある。機が

熟し必要が迫っているときこそ、しなければならぬことをすべきだからである。

クラブは人である。クラブは人によって成り立っているが、禁欲主義者の集団ではない。理由が素晴らしく、に入ったやり方だと感じれば、積極的に行動に移さなければならない。私達が関心を持っていることは、目だつような機会を捉えて、素晴らしい活動をすることではなく、個人個人のやり方を尊重することを、クラブのやり方にして参加することである。

クラブは、その会員が継続的な援助を与えたり、ロータリーの組織として、行動を起こしたり、達成出来るような、幾つかの明確な目標を持つべきなのだろうか。もしそうならば、どんな種類の目的がロータリーの特徴的な目的として認められるのだろうか。さらに、すべてのクラブは、その程度の差こそあれ、どんなことをすれば良いのだろうか。

ロータリーの証明

決議34は、ロータリーは「超我の奉仕」という人生哲学であり、ロータリークラブはこの哲学を受け入れ、それを学び実際に適用することを目指した人々の団体であり、国際ロータリーは、理念を提唱するため存在し、クラブの設立と管理を行い、クラブの実践と活動目的を標準化することを、明確に規定している。

シェイクスピアが「クラブは概念である」と定義したように、クラブが概念であり、概念を実行に移すものならば、ロータリーもまた具体的な概念であり、その概念を実行に移すものでなければならぬ。ローマ法王が、「ロータリーの正確な研究はロータリークラブを研究することである」と述べているし、他の誰かも同じように「ロータリーはロータリーが行っている活動にある」とか「ロータリーの証明はその行動にある」と述べている。

理想的なロータリークラブは、すべてのことがらについて、理論と実践、個人奉仕と団体奉仕の双方が共に備わっていることを完全に証明出

来るものでなければならぬ。もし国際ロータリーが完璧なクラブによって構成されているのなら、素晴らしい人間を育て上げる完璧な組織ということが出来るに違いない。

理想的な目的を持った活動とは、目に見えるもの、形のあるものであると共に、地域社会の生活に、奉仕の理念を表明するものでなければならぬ。理念を目に見える形で表そうと思えば、次のような例をあげる事が出来る。大聖堂は崇拜の理念を表すために存在する。芸術における美の理念を表すために絵画のギャラリーが存在する。宇宙の万物の知識に対する理念のために博物館があり、政治家や軍人や発見者や慈善家の彫像は、彼らが行った人類への適切な奉仕を表し、戦争記念物は、愛国的な奉仕理念や平和の理念に対する記念を表し、病院は健康と苦しみに対する慈悲という理念のためのために存在し、大学は学習という理念のために存在する。

ロータリーに置ける特徴的な目的を持った活動は、それ自体が職業奉仕の理念に基づいた実践を表明するものでなければならぬ。ロータリーは、職業を通じて、地域社会に奉仕をすることが期待されているので

あつて、時に応じてそれらの事例を試みたり教えたりしなければならぬのである。もし職業奉仕の実例が、何らかの形で実現されれば、世の中の人たちはそれを認めて賞讃するに違いないので、ロータリーは、みんながそれに従えるような標準的なものを設定すべきである。もし実業家が職業奉仕の実践を更に深く理解するために役立とうとするならば、ロータリーはどんなことをすれば良いのだろうか。

青少年福祉活動の起源

どのようなにすれば出世コースを歩めるのかということ、しっかりと教えこまれるのは、若い時代においては無いという真実を、はっきりと述べる必要がある。我々が将来に対する夢を描いたり、進路を定めたり、友情を培ったり、習慣や好みや欲望が形作られていくのは、若い時代をおいてはない。裕福な若者にとっての理想とは、自分に適した条件の教養を身につけるために大学に通うことであるが、勤労青少年は働くために、裕福な同年代の若者が大学に通っている時期に、学校に行く

ことが出来ない。国の将来のすべては、これらの勤労青少年が、青年期における数年の間に、どのようにすれば彼らの進路を具体化出来るかに懸かっているのである。彼らは将来の実業家であり、また将来の実業家が頼りにする働き手であると共に、彼らの手に国の運命が懸かっている将来の市民なのである。

いずれのロータリーでも、基準となる方法を決めて教える必要があり、「すべての有用な企業の基礎としての奉仕の理念」を、若者が見て、学べる場所に掲げなければならぬ。どのようにすれば、街角にいる、まったく別の考え方を持っている団体の勧誘員の甘い言葉のなすがままに、まったく別の考え方をいとも簡単に吸収する代りに、権威ある書物以外のものから学ぶことが出来るものを、また、日曜日の聖書以外のものから学ぶことが出来るものを、若者の心の中に植え付けることが出来るのだろうか。この問題に対して提起された考え方は、この問題をどのように処理すべきかを模索しているすべての地区のすべてのロータリークラブにとって、確実な道標となるに違いない。

ロータリー活動の重要な目的が、奉仕理念を広めることであり、その

直接的な方法が、実業界や労働界に属している青少年に対する理解を深めることにあるとするならば、地域的条件を調査した個々のロータリークラブが、委員会を設置して、既にそのような究極の目的を持って活動している機関を援助するために、ロータリーという歯車を回しながら、支えていかなければならない。もしそのような機関が活発に活動しているなら、ロータリーは彼らの活動を支えるために、いろいろなことが出来るに違いないし、もしその活動が不活発なら、ロータリーはその活動を蘇らせるために役立つことが出来るに違いない。もしそのような機関が存在していなければ、ロータリーは、その運営母体となって現場で行動を開始するのに役立つような組織を作って、間違いない結論に達するように上手に指導することが出来るのである。

青少年福祉活動は、もっぱらそれを専門に扱っている組織によって、極めて注目を浴びている活動の対象であり、ロータリーの活動分野は、青少年問題が置き去りにされている国以外では、活動対象が限定されている。そのような組織は、あらゆる部門においてロータリークラブから組織的な援助を受けており、その援助はしばしば純粹に財政的な形が取

られたり、或いは個人奉仕の形が取られたりしている。いくつかのクラブでは、その責任を果たすために実際の活動を援助したり、その資金を稼ぐための催し物を企画したりしており、青少年のキャンプや療養所や集団遠足などの活動を実施しているクラブも多い。

ロータリー活動の中で特徴的な種類に属する、建設的な青少年福祉活動は、それ自体として素晴らしい成果をあげているものもある。例えば、個々のロータリアンが父親を亡くした青少年を助ける活動である里親計画や、青少年のための徒弟見習制度を設けることによつて年定期契約で働くことを可能にしたり、国際ロータリーの勧告に従つて結成された青少年週間や、手工や展示物の展覧会や、組織化された研修旅行や、実業界に入ることを希望している青少年が、特別に関心を持つていることなどについて、高校や大学で実業家による講義を開催することや、必要としている場所に運動場を提供したり、ロータリアンが見かけたり世話をしている貧しい国からの移民の青少年を援助することなどがあげられる。これらの活動の成果はさほど大きいものではないかもしれないが、これらの事例は、援助するのに適した方法で、すなわち、個人個人の特徴に

応じた方法で援助するというロータリー活動に対して、切実な要望があるという証拠でもある。

市民としての活動

都市や町の実生活において、ロータリークラブは進歩的な市民としての見識を持たなければならぬ。奉仕の理念を表明する実業家の組織として、ロータリークラブは、事業上のサービスの方法に改善を加えることなどによって、自分たちの町における活動を指導していくことが望まれている。善良な市民は健全な道を歩む事業を發展させ、健全な道を歩むことによって發展した事業は、善良な市民を作り出していく。我々は市民として地方政治に参画することを意図しているのではなく、これらの中で関心を集めている公的で遣り甲斐のある活動をすることを意図しているのである。

新しい国では、町はすべての面において發展することが期待されている。世界地図に町の名前が載るべきだし、すべての人たちの注目をあび

たいし、一日も早く、地球上のすべての人たちにも町の名前を知ってもらいたいのである。その結果、それに関連するあらゆることが要求されるのである。

醜い鉄道の駅、悪い市街設備、汚いホテル、狭くて汚い道路、壊れたままの建物、悪い道路などのあらゆる外面的、内面的な貧弱さが我慢ならないのである。時には、ロータリークラブは、市の発展について大きく関与し、市民団体の設立を企てたり、商工会議所による積極的な活動や、地方自治体や州議会や市議会の無党派の政策に対して提案したり働きかけることによって、他の組織と共に結果を得るために活動することもある。

我々がロータリークラブのことを市民団体と呼んだ幾つかの例として、クラブが町の広報サービスのために、自らの費用で適切な出版物に広告スペースを確保したり、「自宅でくつろぐ週間」の組織化や、冊子の出版、町の情報センターの設立、生活改善計画のコンテスト、空き地の提供、建築業者から所有権を取得するために公的資金を工面して地域の景勝地を保全したこと、「きれいな町」キャンペーンなどを実施したことをあげ

ることが出来る。そのような活動をするために、多くのクラブには公共奉仕委員会が設置されている。

町の生活を快適にするための奉仕は、ロータリーによって進められ、あるクラブによつて小劇場事業が始められ、それが成功したことによつてそれ以来ずっと続けられている例すらある。別のクラブは毎年音楽祭を開催したり、また別のクラブは絵画展の賞を贈つて市民の芸術振興に寄与している。

幾つかのクラブの社会奉仕委員会によつて進められていることに、財政面やそれ以外のことで援助を必要としている慈善施設に対して、助言を与えるために活動したり、または重複しがちな組織の活動を調整するような活動があげられる。たぶんロータリアンのような、実業の経験が深い人たちは、基金が有効に使われるように運営上の実用的なアドバイスを与えることによつて、大いに役立つことであろう。

様々なささやかな奉仕活動の中で、刑務所の訪問や釈放後の囚人への援助などという個人奉仕が行われていたという証拠があることにも触れておきたい。国際的な活動をしている人たちが、そのような場所を訪れ

て、世界の活動について囚人と自由に話しをするという事実こそ、真の奉仕であることを証明するものである。

社会奉仕を行う上で、重要なことがある。政治的な分野が社会奉仕分野の一部なので、ロータリーは遅かれ早かれ政治的な分野に立ち入らざるを得ないのではないかとこの質問をしばしば受ける。州政府や行政の各分野の施策立案を含んだ生活のすべての分野に、ロータリーの理念を堅実に適用することを考えないで、ロータリーの理念について考えることは不可能だと言うことが出来る。ロータリーの方針に沿って確実な考え方をしていこうという人は、型にはまった考え方の枠を取り外して、すべての横断面を捉えた意見を作り上げると共に、時と場合によっては、独力でそれを運営したり、自らがそのプログラムの一部を支えていかなければならないのである。

政治的な事柄に、思いやりの心を適用しようとする人たちにとっては、例えば、事業に対する関心や人種差別に対する同情や宗教上の信念などに対して、考えを巡らす結果になるが、それは単にロータリーだけの問題ではないと言うことが出来る。

彼らが述べるロータリーの思考とは、奉仕の理念の進むべき道に沿って、また利他の方針に沿って考えることである。従って、ロータリアンの政治は、その動機も目的も利他の政治でなければならぬ。人種に対する強い先入観や信条や階級や経済的な関心や多数派に対抗するために少数派のために活動したいという要望などが、大衆運動の枠の中で形作られることは殆どなかったはずである。そのようなロータリアンは、社会が良くなるのも悪くなるのも、社会を構成している個人個人であることを信じながら、権力も富も、それを持つに最もふさわしい人たちに属すべきであり、そのことに関して彼らを信頼することが最も正しいことだと信じながら、先ず他人にとって良いこととは何かを捜す人々だと評価することができる。

もしロータリアンがそのような考え方を持っているのならば、政党の一つ位は支援出来るかも知れないし、そのような政党は一つもないかもしれない。特別な問題が起こったときには、どんな政党であろうと、そのようなロータリアンを支援してくれることは、充分考えられることであり、正直で公正な物の見方をするところ、政治的に最善で信頼に値

する立場にあることを表明しているのである。

第4章 知己と親睦

奉仕の機会として知り合いを広めること

知り合いという言葉は、通りや列車やバスの中や、クラブやレストランの中で偶然話し合ったり、会釈をしたり、微笑んだりする程度の、友人と見知らぬ人との中間に属する、ちよつとだけ、または表面上だけ知っている人という使われ方をしている。人間は、自分の個人生活における嗜好や趣味や信条などを通じて、社会に役立たなければならぬということは、誰もが知っていることである。人々はお互いに相手が好きか、嫌いか、無関心かの何れかである。今こそロータリーが、知り合いになることが単なる人生の偶然ではなく、より多くの意義を持つものであることを我々に語り掛けるときがやって来たのである。奉仕の機会を広げていくために、何らかの行動をとらなければならないのである。

会員の選考

しかしながら、ロータリーは、クラブを満杯にしようとして、表通りから裏通りに至るまで、ありとあらゆる人をを集めるようなことはしない。個人的に好きか嫌いかという先入観を抜きにして、規則に照らし合わせた上で、知り合いになれる人を会員として選ぶのである。あなたに声が掛かるか、私に声が掛かるか、二人とも駄目なのか。それとも、あなたに声が掛かって、私が見過ごされるのかも知れないし、例会に呼び出された我々がお互いに出会って、まったく見知らぬ者同士が知り合いになれるかも知れないのである。

規則上定められているロータリークラブの構成方法は、彼らがお互いに知っているか知らないか、あるいは好きか嫌いにかかわらず、他の業種の地域の代表者が一緒になって、職業分類を満たしている適切な人を選ぶという取り決めに従って構成された委員会を設置することである。彼らは不倶戴天の敵同士かも知れないし、社会生活や公的生活におけるライバル同士かも知れないが、規則さえ守られれば、彼らが事業上のラ

イバルになるはずのないことは明らかである。すべてのクラブは、その地域の職業分類を調査して、その職業分類が充填されているか未充填なのかを示す、理想的な会員名簿を最終的に完成するように勧告を受けているのである。

職業分類を誠実に行おうとすれば、個人的な理由から会員が要望している、夫々の会員に適合した職業分類を見つけないといけないという、現実の難しさと、非常に強い圧力が課せられるのである。規則にこだわる余り、問題となるケースもたびたびあるが、ロータリーの力強さは、規則を厳密に守ることによって成り立っているのである。

クラブに属している者は全員、仲間同士知り合いにならないければならぬことは、会員として欠かすことの出来ない義務である。あなたは、単に彼の名前ではなく、職業分類も知ることが出来るだろう。クラブ理事会が彼のためにする最初のことからは、例会の間中ずっとボタン・ホールにつけておかなければならないバッジを、彼に与えることである。

熱心な友愛委員会は、各々の会員がお互いによく知り合う機会を見守っているのである。昼食における着席の方法も、決して同じ人の隣に連

続いて2回座ってはならないと決められるかもしれないし、1ヶ月間は定められた人たちと同じテーブルに座り、次はまったく別の人たちと座るために他のテーブルに移動するように決められるかもしれない。テーブルを管理しているチーム・リーダーは、あなたが知り合いを深めていくかどうかを確かめなければいけないのである。

親睦を深める方法

しかし、親睦を深めるための他のどんな方法よりも、規則的な毎週の例会が、クラブの全員がお互いに知り合いになることを可能にさせ、また、可能にするはずである。昼食の前に、ロビーで会長の歓迎会があるかも知れないし、数分間に、誰もが、みんなと言葉を交わす機会があるかも知れない。もちろん、あなたは別のクラブから来たビジターの歓迎を受けるに違いない。そのことに関してビジターが気付いていないとしても、その役割は友愛委員会の仕事の一部である。友愛委員は、ビジターが誰であり、何をしており、どこから来たかが一目で知ることが出

来る特別なビジター用のバッジを渡してくれる。ビジターは国の果て、いや世界の果てからだって来ることが出来るのである。

ロータリーのロマンスは、思いもよらない場所における注目すべき出会いや、長い間忘れていた友人の突然の出会いや、お互いの新しい奉仕の機会や、昔の仲たがいの修復などの物語に満ち溢れている。

ロータリーの厳しい規則の一つに、知己と親睦を深めることを基本とした出席がある。他の多くの社交クラブのように、単にロータリークラブの会員であることだけでは充分ではなく、例会出席の義務を果たすことによって、初めて、会員の効力が発揮できるのであって、正当かつ充分な理由なしに、連続して欠席することによって、しばしば会員身分が自動的に終結することがある。出席しないようなロータリアンは、真のロータリアンではないから、クラブから排除して、出席が可能で、その心構えが出来ている別の人を入れるべきである。

クラブは、単に印刷された会員名簿だけで成り立っているわけではない。名簿の中に名前が出てくる人たちは、同じように例会にも出席する人たちでなければならぬのである。欠席することは、例会を空しいも

のにし、多くの時間や困難や遠路という代償を払って、メッセージを伝えにきている卓話者の機会を無駄にすることを意味すると共に、個々に与えられた職業分類を代表する者が、その代表者として最も必要なその日に、不在であることを意味しているのである。どのクラブも、年間を通して80パーセントを下回る出席記録を黙認することは許されておらず、ほとんどのクラブは、100パーセントに近い出席記録を目指していることを誇りにしているのである。もし会員が自分のクラブに出席出来なければ、同じ週の7日の間に、別のクラブで出席すればよく、またそうすることが期待されているのである。出席義務の規則は、別のクラブを訪問するという方法によって保証されているのである。

ロータリーの実績

知り合いを広める活動に対するロータリーの実績はどうであったか、それによって達成された奉仕の機会はどんなものであったかについて、今質問してみたい。知り合いを広めることによって個人個人にどれだけ

良い影響を与え、その結果として社会にどれだけ良い影響を及ぼしたの
だろうか。このことは、この本において答えなければならない、我々自
身に課せられた質問でもある。

知り合いを広げることに対するロータリーの実績は、優に2,000
を超える世界中の商工業中心地で、大は500名を超えるものから小は
25名までのグループが、友情溢れるグループを作ったことである。こ
れらのロータリアンたちは、単なる交友関係を超えて、お互いに深く知
り合っているという意識を持っている。彼らがクラブの外で出会った時
にも、当然のこととして、会釈をしたり微笑んだりする以上のものがあ
り、彼らがお互いに取り引きする時にも、当然のこととして、ロータリー
の倫理に従った考え方で取引が出来るのである。そのようにして、ロー
タリーは個々の人たちが良くなるように手助けするだけではなく、世界
中の2,000以上にも及ぶ商工業中心地にある人たちのグループに良
い影響を及ぼしているのである。

活動分野の広がり

クラブ例会だけでは得られないものは、異なった国やいろいろの場所からロータリアンが集まってきて、まるで同じクラブに属しているかのような開放感と親密さで集う、他クラブ間との交流や地区大会や国内大会や国際大会によって得ることが出来る。即ち、ロータリーは、それを一般的なものにするために、知り合いを広げるといふ活動を進めているのであって、ロータリアンの友情を通じて、都市間や各州間や国際間の友情がもたらされるのである。

知り合いを広げることによって、奉仕の機会が広がっていく。職業分類制度はその人の職業によって、その人を識別する制度であって、ロータリーにおいてその人を知るといふことは、事業におけるその人の奉仕の種類について知ることである。

ロータリーは、職業の規制は全く存在しない。創始者ポール・ハリスの最初の動機は、職業の存在が語られる所には、少なくとも一つのクラブを設立する必要がある、またその設立を論じるべきだということであ

る。人の職業は価値あるものであり、尊いものであると共に、その人の奉仕の機会になるものである。

何故このことが、真剣に語り合われないのであるか。このことが語り合われることによって、何が改善されるのであろうか。ロータリアン同士が会うことによって、その人のことが分かると同時に、その人の背景にあるものが分かってくる。ロータリアンは、仕事場、事務所、倉庫、店、学校、銀行、研究所、パン店、酪農場、大使館、領事館、ホテルやレストラン、病院、スタジオ、手術場、法律事務所、法廷、教会や礼拝堂、新聞編集室、劇場、発電所などという現場から直行してくるのである。

もしあなたがロータリアンの仲間のことを本当に理解し、もっと交友関係を深めていきたいと思えば、あなた方が現実に情報を得る世界は、いくらでも広がっていくのである。そのような知識を身につけることによって、あなた自身の奉仕の機会が広がっていかないと、誰が言い切れるのであろうか。少なくとも、あなたが必要とする情報の四分の一位は得られるはずである。

適切な職業分類を持っているロータリアンの情報を自らが利用することは、ロータリアンとしては全く合法的なことであり、その人が真実のロータリアンである限り、決して、その情報を提供することを渋ったり断ったりすることはないはずである。ロータリアンとして、世界の隅々のロータリアンと接触出来ることは、すべての人と友人であり、援助を求める特権を与えられた人であることを意味しているのである。

職業上の発想の交換を実践に移すことは、最初にロータリークラブが発足した当初から始まり、今日に至るまで続けられていることである。会員同士がお互いにもっと理解し合い、お互いの奉仕の特徴をもっと理解する方法として、進めて行かなければならないのである。

ロータリーの親睦の社会的有用性

このようにして、ロータリーが知り合いを広げていったことは、今や、社会に対する強みとなつて、会員たちの立場を有利なものにしている。その度合いは、ロータリークラブ自体のいろいろな面を、社会がどの程

度評価しているかによるが、果たしてそのような評価自体が存在しているのだろうか。その回答は次のようなものである。

ロータリークラブの創立や真の性格や目的などについて、利用可能なあらゆる方法を通じて広報することによって。

会員の代表者としての資格を通じて。

社会に最大限の利益を与えなければならぬ会員という身分を通じた、個々の会員の自発的行動によって。

クラブの機構上、これらの奉仕活動の成果を最初に提供しなければならぬのは、他の人たちにクラブ雑誌や広報を配布する責任を負っているクラブ役員か広報委員会であり、二番目に会員委員会、三番目に公衆活動または公衆奉仕委員会である。もし彼らの前に、これらの委員会のそれぞれが、特に真っ先に友愛委員会が姿を表わせば、ロータリーの綱領の第4条に「奉仕の機会として知り合いを広めること」と書かれているように、社会に対して可能な限り最大限の利益を与えるという、ロータリーの義務を果たすことになるのである。

教育部門

しかし、ロータリアン自身が、親睦を深めるといふ義務の一部ともなっている、彼ら自身の活動の目標を理解していることは、何にも増して力強いことである。親睦を深めていけば、団体意識が芽生えてくるために、これが有利に働いて、クラブを集団として強いものにしていくのである。クラブというものは、地域社会全体に奉仕の理念を高める目的のために存在していると共に、組織として実践しなければならぬ様々なことがらについて、会員に対する教育を進めていかなければならないのである。従って我々は、教育に関するクラブの委員会の実質的な奉仕を必要としているのである。毎週の昼食例会のために卓話者を手配することは重要な義務であり、プログラムは、二義的な目的を持った情報や催し物だけでなく、この目標を充分に考える機会を与えるものでなければならぬ。

団体意識を育み、奉仕を更にいっそう強化するための交友関係と機会を増やす手段として、会員は一つまたは幾つかのクラブの委員会で奉仕

するように勧められているというよりは、義務化されている。クラブが、組織の一つとして最も基本的な機能を効果的に果たせば、社会はロータリーの奉仕によって十分な恩恵を受けるはずである。

団体活動をするためには、その団体に所属する各々の会員は他の会員と信頼関係を持たなければならず、そのような信頼関係を得ようと思えば、先ず最初に、親睦と知己の関係を築き上げなければならぬのである。

ロータリークラブは、会員を入会させ、ビジターを迎え入れるために、大きく門戸を開放したことによって、外部から会員を厳しく限定することから脱却し、親睦の精神を広める社交的な組織となった。

もし前に述べたような提案が実行に移されれば、これらすべてのことながら、どこから導き出され、究極の利益は何かと尋ねられるかも知れない。利益は、少なくとも三つの方面、すなわち個々のロータリアン、入会しているクラブ、クラブが存在している地域社会にもたらされるはずである。もしクラブの友愛委員会がその活動を完全に成し遂げれば、会員たちがより熱心に、より情熱を傾けさせるような雰囲気を作り出す

に違いない。毎週の例会は関心深いものとして注目を集め、すべての実業家を元氣付けるものになるに違いない。ロータリアンの関心は高められて、無意識のうちに、ロータリー精神も、出席も、真のロータリアンになるように努力するはずである。

個人個人や会員全体が幸せで活発で役に立つ存在であることは、結果として、クラブが幸せで活発で役に立つ存在であることを意味する。幸せであることほど、影響力の強いものはなく、クラブの範囲を越えてあつと言ふ間に広がっていくものである。周りの地域社会は、成功したロータリークラブの真価を認めるようになり、普通ならば決して頼まないような、価値ある活動を引き受けることを頼むようになるに違いない。

ロータリークラブがその機能を發揮している都市や町では、クラブのお蔭で、その都市や町がより良いものになっていった例が、容易に見られる。しかし、クラブは活動するものであり、生き生きとしたクラブ奉仕をするためには、特別な活動に従事する人々が、現実に知己と友情を深めていくことが、最初の目的となるに違いない。

第5章 ロータリーと産業

ロータリーの綱領の第5条には、「あらゆる有用な職業は尊重されるべきであるという認識を深めること、そしてロータリアン各自が職業を通じて社会に奉仕するためにその職業を品位あらしめること」と明記されている。

ロータリークラブは、その他のすべての目標を達成する前提として、先ずこの目標の達成を目指して、職業分類制度による最初のステップを踏み出したのである。ロータリーは、親睦の精神に基づいた社会奉仕に協力し、自らの職業だけではなく他の有用なすべての職業の価値を認めるために、高い道徳的水準を掲げることが義務として、自らの事業および専門職種の指導者として責任を、職業分類によって個々の会員に思い起こさせたのである。しかし、職業分類制度を批判的な目でじっくりと見れば、会員身分は、事業や専門職種の経営者や権限を持った役員に限定されているように見えて、労働者や従業員の立場では、ロータリーに

入り込める余地がないことも明らかである。ロータリーに対してされてきた攻撃は、産業界や産業関連の問題に対する全体としての活動の対象が、経営者としての立場に限定されていることに対する攻撃なのであって、批評家に言わせれば、ロータリーの考え方は、恣意に満ちた考え方と言うことになるのである。

経営者階級の力の限界

ここで我々は、起源にさかのぼって言及するために、この書物の前の方に戻る必要がある。ロータリーは、元々、実業家の人たちの親睦組織として発足したものである。実業という言葉は、わが国の昔の地域社会の中にはまったく存在していなかったものだが、その中には、信頼に値する職業であり、社会的に特殊な職業である専門職種の多くが含まれている。ロータリーの初期には、労働者が実業家や専門職種の経営者と一堂に会することはなかったし、成功して毎週の実業家の昼食クラブの会員になるような望みが叶えられる可能性がなかったことも確かであった

としても、ロータリーの会員に、労働者の代表を含めようという問題が提起されなかつたことは、少々腑に落ちないことである。

組織を作り上げようとした人たちは、外国に新しい領域を広げること
に思いをはせ、寸暇を惜しんで、奉仕の理念と親睦の精神を可能な限り
広げていこうと努力した。しかし、世界中のすべての文明国に、この運
動が広がることによって、経営者階級という元来の会員身分の制限は、
再検討しなければならぬ対象となつてきた。もしロータリーが、社会
に奉仕する機会として、すべての有益な職業の価値を認めるのなら、そ
の会員身分を永久に制限し続けるべきかどうかという疑問が浮かんでく
る。もし制限し続けるのなら、ロータリアンは、労働者階級やその階
級に属する会員から追及されるに違いない有益な職業という定義を、ど
のような方法で認めるのかを、はっきりしておかなければならないこと
になる。もし会員身分が経営者だけでなく、従業員を含むように、その
制度が拡大解釈されたとしたら、その範囲はどのような限界まで認める
べきであろうか？

個々のロータリアンと産業との関連性

先ず最初に、我々が取り上げなければならないことは、ロータリアン間における適切で理論的な関係は何かという問題と、地域的、全国的、国際的なロータリー活動と産業界との間の問題について、我々が述べておかなければならないことは何かというような問題についてである。

ロータリアンとは、どのような人たちなのだろうか。ロータリアンとは、奉仕の精神を以って自らの職業を遂行し、事業や専門職種の人々の世界的な親睦を通じて、理解と善意と平和を究極の目標として、同じような考えを持った他の人たちと協力するという義務を受け入れることを、その地域で認められている事業や専門職種の会員から選ばれている。

実業家としてロータリアンは、大部分のケースでは、多い少ないの差はあったとしても、労働者を雇用している人たちであり、また、ほとんどのケースでは、ロータリアンは、労働者の雇用主または代表者間の協定の下で作られた同業者組合または同業者連盟の会員である。

一般的なクラブの会員の大部分は、他の人たちとの関係の少なからざ

る部分が従業員たちの個人的な考え方で左右されやすい、小規模な事業所の経営者に過ぎないという事実を、ぜひ、ロータリーの研究家は銘記すべきである。同じ考え方を持っている父親や亭主や兄弟がいないように、まったく同じ考え方を持っている経営者は存在しない。経営者と従業員の間の関係は、反感も存在するが、すべての他の人たちとの関係よりも密着したものであり、その悪い面を改善することが、労使関係を改善する最善の方法なのである。

義務を成文化する試み

レストラン協会の道徳律で、経営者、従業員関係を成文化することが試みられ、雇用、新しい従業員の融和、昇給の機会、研修、雇用期間、労働条件、解雇、娯楽施設などのやり方について、有益な考え方、労働者の関心や福祉の研究、利益の条件、能力のある者と無い者との評価の判定、雇用、解雇、賃金、労働時間、休暇、安全を公正に取り扱うための規則、省力化機器、健康、雇用の継続、教育、若年労働者の福祉対策

などが定められている。

現実的な解決策への要望

しかし、あらゆる場所における、あらゆる種類の産業を指導する代表者として活動するのが、ロータリーの活動であるということは、厳然たる事実である。ロータリーの究極の目的を達成するために名を連ねたこれらの産業の指導者たちは、それが例えどんなことであろうとも、業界の問題を解決するために実践しなければならぬことがらに貢献したいと願いながら、彼らの仲間の先頭に立って、自ら活動しているのである。

1926—27年度RIBIの会長を務めたロータリアン、シドニー・パスコール **Sydney W. Pascall** の質問演説に対して、どのようなすれば、奉仕と生産性という産業界における相反する条件を軽くし、制限を取り去るために、雇用者と労働組合指導者が協力出来るのだろうか、また、どのようにすれば、充分に奉仕出来る産業界を作り上げるた

めに、彼らが真心をこめて協力出来るように、労働者の安全がはかれるのだろうかという問題について、幾つかの注目すべき意見が寄せられた。発言者の中には、ロータリー運動の傍観者は誰一人としていなかった。問題の中で少なからず皆の関心を集め最も注目を浴びたことは、職業分類制度の下における責任を確認したことであった。ロータリー運動が経営者と従業員間でよりよい関係を保つべきであるということに関心が集中し、更にロータリーが、どのような場合にもその関係を改善するための機会と実力を持っていることが証明された。

経営者の代表としてのロータリアンの義務

経営者を代表するロータリアンと、既に会員になっている労働組合の代表から寄せられた意見は、ロータリアン、パスコールによって次の通り要約されている。

1. 経営者としてのロータリアンは、自らと従業員の間で友好的な気分

を高めるように努力しなければならない。経営者は、従業員である全職員に対して、自らの個性を発揮させるために努力する義務がある。経営者として、恩着せがましい態度や命令的な態度ではなく、指導力を発揮し、人情味ある産業界を目指して、数多くの自らの従業員を一人一人に接する義務がある。

2. ロータリアンは、自らの同業者組織の中で、またその組織を通じて、自らの事業において個人的に実践しようとして捜し求めてきた目的と同様な目的を推進していかなければならない。

3. ロータリアンは、いかなる政党や経済学派からも絶対的な独立を保ちながら、産業界の融和と協力と話し合いを進めることによって、善意に満ちた雰囲気を作り出すと共に、漠然とした先入観や関係者の熱狂ぶりよりも、事実や理由を明らかにして、地域社会にとって有利になる立場で、問題点や解決策について議論出来るような雰囲気を作り出し、これを育むように努力しなければならない。

そして、次のことを実行しなければならない。

(a) クラブとして実践するクラブの活動は、単にクラブ全体の賛同を得るだけではなく、その活動はロータリー運動の独立性と地域社会におけるクラブの有用性というロータリー精神と一致しなければならぬ。

(b) 個々のロータリアンとして、奉仕の理念に鼓吹された市民としての素晴らしい活動に協力しなければならない。

最近行われたイギリスのロータリー地区大会において、いくつかの有益な言葉が、講演者によって披露されたが、その言葉の一つ一つは、大勢の労働者を抱えている異業種の経営者に対するものであった。

経営者は産業界における指導者でなければならない。

指導力とは、犠牲と奉仕を意味するものである。

経営者は労働者の信頼を勝ち得なければならぬ。

快樂のために費やす時間は、そんなにはずである。

働くことは誇るべきことである。

労働者は、自らが果たすべき義務を認めなければならない。

個々の経営者は、自らの従業員に対して暖かい個人的関心を持たなければならない。

彼らと特別な関わりを持っていることを、彼ら自身が述べる機会を与えなければならない。

労働者は、事業の成功を分け与えられるべきである。

事業の労働者には、公平な雰囲気や個人的な接触や参加の機会が与えられなければならない。

利益を配分することは、ロータリアンである経営者として、長年関心を持ち続けてきた問題であり、多くのロータリアンの中で、共同経営を効果的に計画するために、提案したり処理したりする活動が続けられて

いる。

この問題は、ロータリークラブの講演者によって、ずっと語り続けられてきた話題の一つでもある。産業界におけるロータリーの義務として、個々のロータリアンが取り組まなければならないことは、職業分類を貸与されたロータリーの代表者が、模範となる経営者として、あらゆる可能な方法を駆使して努力することと、自らの同業者組合を通じて、社会に貢献することによって、企業の労働者と可能な限り親密な関係を樹立すべきであるという結論に達する。

もっと大きな問題に対する心構え

産業に関係するもっと大きな問題に対するロータリアンの心構えは、その職業における経営者か従業員かにかかわらず、社会に奉仕するため
の機会となる、自らの職業に関する各々の人の考え方が基本となること
は、言うまでもないことである。このことは、産業界においてしばしば
要求されるような、神秘的な新しい考え方を持つことではなくて、経営

者と従業員間の協力という新しい基本的なことが要求されていることを意味するのではないだろうか。我々は、経営者が具体的な例によってその方法を示さなければならぬことを指摘しているのである。しかし、ロータリアンは、産業界全体にわたって、奉仕の理念を広げるのに役立つことが、自らの義務であると考えなければならぬ。

ロータリーはどのようなようにすれば、ロータリー活動の究極の目的を、労働者や大人や子供に教えることが出来るのであろうか。

労働者階級の聴衆を対象に行われた、ロータリーの講演者によるロータリーの究極の目的に関する何回かの演説の機会を通じて、労働者階級に対する会員身分の制限は存在せず、別の階級の人たちを入れるべきではないと考えたことは決してなく、実業界と産業界の諸問題に関するより広く、より理想的な考え方を採り入れるために、経営者階級の会員間の協力と友情を確保することを意図したものであることが述べられてきた。特に取引方法の分野におけるロータリーの啓蒙が進むにつれて、奉仕の理念と高い倫理基準に基づいた取引をすべきであるという、経営者の義務を明確に定義することが、成功につながるという、経営者と従

業員間の関係についての話題が探求されるようになってきた。

もし、彼らが昔から述べ続けてきたように、将来修正しなければならぬ、理想的な経営者や同業者組合の労働者に対する義務として、ロータリー活動が注目を浴びていることが、もつと一般的に知られるようになれば、ロータリアンと労働者階級の公式な代表者との間の、どのような直接的な接触も、弊害を起こす可能性は無くなり、むしろ利点のほうが多いことが述べられた。たとえどのような方法であろうとも、そのような広報の効果は、個々の労働者や同業者組合の義務の共同声明として、労働者階級の代表者からの賛同を取りつけることが出来るに違いない。

労働争議として可能な行動

特に石炭のような重要な産業で常に対立の対象となっているような、一定の産業において労働争議を引き起こす共通の原因については、あらゆる可能性が公表されている。その原因は単なる地域産業界の問題に過ぎない場合もあるが、大部分は、管理上の基本条件について根本的な意

見の相違がある場合が多い。争いの場には、それを收拾しようとする、州や他の公共機関や労働者を代表する組織による、遠慮のない政治的な議論が投げかけられる。

この問題に関するロータリアンの見解は、決して分かれているわけではないが、あらゆる種類の事業と専門職種に携わる人々によって構成されている会員の立場上、資本家対労働者や、個人主義対集産主義の問題については、それぞれ異なった立場を取っていると共に、異なった考え方を持っているのである。従ってロータリアンの大多数は、これらの問題について議論することを了承しないであろう。しかし、このことに関しては自信を持って言うことが出来る。

ロータリアンであるすべての経営者は、彼ら自身の雇用のやり方に関して、妥当な批判に応え、かつその問題に直面せざるを得ない立場にあることだけは間違いない。ロータリーでは別に罰則が課せられているわけではないが、クラブは、会員たちが、現実に、個々の職業によって奉仕の理念を実証しようと努めていることをはっきり示す活動を通じて、事業上の職業分類の代表者として、自らが従事する職業の頂点にあるこ

とを肝に銘じることが期待されているのである。

ロータリークラブが、その代表者としての性格上、いろいろな状況の下で、地域的な労働争議の仲裁を進める立場にあることは、想像に難くない。

調停者としての経営者

しかし、ロータリーは単に受身の立場だけではなく、経営者にとって最も重要な組織としての機能を發揮する。最近の産業界の条件が改善されているように、自らの経験に基づいた、何か建設的な意見を提案する経営者が一人でも増えることを、すべての地域社会が望み、期待しているのである。多くの経営者たちは、ロータリー活動を通じて、自らの事業所における経験を効果的に試みることで、産業界の福祉や調停に関する先駆者としての役割を果たしてきた。そのような試みは、光の当たらない所を照らすという意味から、単に正しいだけではなく、人間に希望を与えるものでもあった。

ある経営者は利益分配制度を試みて、それが素晴らしい成果を修めることに気付いた。別の経営者は、労働者のクラブや保養地を作り、また別の経営者は、労働組合そのものを含んだ労働者の集会を認めて、その会場を提供したり、労働条件を話し合うために、労働者と管理職の間の定期的な会議を提案した。公式機関誌に収録されるクラブや地区大会のロータリーの宣言には、経営者個人個人がどのようなことを実行し、それが十分に機能しているという報告を発表すべきであろう。

労働者と分かち合うための提案

ロータリーの理念が集約された特筆すべき成果として、職業上の二つの階級に対する分け前、即ち(1)資本家の分け前と(2)労働者の分け前を作り出すために準備しなければならぬという権利を法的に確立した二人のニュージークランドのロータリアンである、ハミルトン・ロータリークラブのフランク・ハーティとハリー・バルダーの計画をあげることが出来る。前者は、リスクを伴った経営に対して、現実の市場にお

ける金銭的価値に加えて、そのリスクの割合に応じた固定的な報酬を経営者に与えることであり、後者は、奉仕活動に従事するすべての人たちが備えていなければならない能力を、経営者から従業員全員に提供することである。

例えば、労働者と経営者が協力して、生産量の調整を実行した例や、その他の同じような実例など、もし経営者が自ら実践したくなるような、ロータリー精神に基づいた実例がたくさんあれば、そのことを力強く主張すべきではないだろうか。

例えどんなに努力しても、苦勞した割に、作った製品から利益が得られなければ、労働や努力は別にして、経営者、雇用のどちら側にとつても、奉仕というロータリーの理念を適用することが道徳的であることを正当化するわけにはいかないのである。もし資本家の側に、労働者や地域社会に協力していこうという考え方があるのなら、それがうまく行かない原因は、労働組合の側にあることが明らかになるに違いない。国や世界が要望しているものは、効果的な消費力の増加に伴った、生産量の増加なのである。

ロータリーにおける職業上の代表

このような問題は、政治の死角に属する問題だとみなされている。ロータリーが、悪い道徳は悪い政治を産み出し、正しい倫理観を持てば、政治は自ら律されるものであると説いているのは、間違いない事実である。産業界のいざこざは、国際間の紛争ほど相互理解を欠き、悪感情に満ちたものではないので、善良な中庸と善意の立場を取れば、人間も問題ももつと身近な存在になるはずである。これは、どのようにすれば、事業の経営者と労働者間に親密な関係をもたらすことに役立つかという、この運動の話し合いにおいて、後者の立場からの代表者が考えなければならぬ問題を、ロータリーが我々に提起しているのである。

ロータリーにおいて事業上の従業員を代表者として認める方法として三つの可能性が考えられる。一つは、労働組合の役員を会員として適正であると認めることである。二番目の方法は、同じ職業分類に属する経営者に対応する者として、靴製造・・経営者、靴製造・・従業員というように、自分の職業分類を従業員に認めることであり、三番目の方法は、

ロータリークラブが、職業分類された経営者で構成されているように、正しく職業分類された従業員によって構成されているクラブを、ロータリーの援助によって組織することである。

労働組合の代表者

最初に言っておかなければならないことは、もしもその町にある、すべての労働組合が、その役員をロータリーの会員として入会を許されるのに適格であるとして、その要請が受理されれば、大なり小なり政治的な固い約束で結ばれた人たちが推薦されることによって、これらの支部が、労働組合連合会の支配下に入らざるを得なくなるケースが続出するかもしれないということである。「労働組合」は、国際ロータリーにおいて承認された職業分類であり、アメリカや他の国だけでなく英国の多くのクラブでも充填されていることは、厳然たる事実である。ロータリーは、あらゆる種類の団体の代表者の入会を許すべきであり、労働組合を拒むことは、政治的な差別とみなされるに違いない。

労働者のための職業分類

技術者の職業分類を含むように、ロータリーの定款を改正することは、国際ロータリーのすべての地区において、しばしば議論されたり提案されたりしてきた。そのような問題に関して議論することは、たとえ支持する態度を表明するわけにはいかないとしても、公正に議論する必要がある。もしロータリーが、職業を代表した活動ならば、どこに問題があるのかという理由を提示することこそ、経営者や最高責任者の責任ではないだろうか。職業もまた従業員によって同じように代表することは出来ないのだろうか。経営者が正当かつ適切な代表者として、事業を方向づけたり運営することは、そのような事例は稀であったとしても、労働者が貢献している他のことがらと同様に、単なる選択肢の一つではないのだろうか。事業を適切に代表していることを主張するためには、経営者として奉仕をする代表者と従業員として奉仕をする代表者の双方が必要なはずである。

この意見に対して、現実上また原則上からの反対意見がだされるであ

ろう。従業員にとっては昼食会に出席することは難しいことであり、たぶん、雇用主が特別の配慮を払わない限りは、仕事から離れるには長い道のがかかるに違いない。当の本人も、自らと人生観のあまりにもか離れた、ダーク・スーツをまとった会社の事業主や専門職務の人たちの中にいることが、心地よく感じるはずもないし、対等という立場で、クラブの会員になることがかなうはずもないだろう。さらに、経営者としての立場からは、労働者階級の代表者の立場の者が、産業の諸問題について自由に討議したり、意見をさしはさむことは、我慢できないことであろう。会社のことは、経営者階級の人だけが発言出来るのであって、その他の立場の人は、口をさしはさむべきではない。ロータリーは、二つの階級の活動としての実験的な試みよりも、単一階級の活動の方がずっと良い活動をする事が出来るはずである。経営者の昼食例会クラブとしての要素は、重大な意義を持つているのである。

この議論に対して、結論をだしたり、納得する回答をだすことは不可能であるが、ロータリーの定款を少しでも変更しようとするれば、大きな困難が付き纏い、もし解決することが可能であっても、解決するには何

年もかかるので、少なくとも強い意思を持っていることを表明し続けることが必要となろう。

従業員のリロータリークラブ

従業員のリロータリークラブに関する最終的な解決策が、1925年のリロータリー地区大会で、前イギリス政府閣僚アーサー・ヘンダーソン下院議員によって提案され、好意的に受け取られた。これは決して驚くことではなく、そのような各々の職業分類を代表した労働者のクラブは、労働者階級の活動の傾向と完全に一致するものである。労働者階級の間においても、経営者階級の間と同様に、奉仕という共通理念を追求するために、よく相互理解をする必要がある。即ち奉仕とは、理想的な資本主義的な考え方であると同時に、労働者組織の理想を実現することにもつながるのである。労働者のリロータリークラブは、労働者自らの目的のために奉仕することである。経営者のリロータリークラブと連携することは、彼らが望む通りに、密接にすることも、疎遠にすることも可能で

ある。もしもより深い結びつきを望むのならば、折に触れて、指導者が合流して合同会議を開催することも可能である。

全体として38ヶ国の会員を擁する国際ロータリーは、現在の定款の下で加入しているクラブ以外の如何なるクラブにも、ロータリーという言葉を使ってもよいと言う権限を持っていないのである。従って、すべてのことがらを作り上げていく上で機能すべき発展の法則は、ロータリー活動においては、未だその機能をまったく發揮していないと言わざるを得ない。もしロータリーが素晴らしいものならば、それを成長させていく必要があるのである。

要約

今まで我々が述べてきた問題について要約してみたい。産業界に対するロータリー活動の対応は、労働者階級の人々が何一つ不自由なく満足した生活を営むことこそ、すべての産業の信頼につながることに留意することが、個々の実業家の義務であることを認識すること。自らの事業

において、協力の原則を実行することを最大限目指すこと。経営者と労働組合の間で、理解と善意というロータリー精神に基づいた話し合いをし、しばしば開催することによって、相互の義務に関する理解を図るようにすること。個々の経営者と労働者の間のより密接な関係によって、ロータリー活動の重要な目的の一つである、個人の間のみならず労使間における奉仕の機会として知己を深めるように努力すること。

第6章 国際理解と善意と平和

国際ロータリーの綱領第6条、「ロータリーの奉仕の理想に結ばれた実業人と専門職業人の世界的親交によって、理解、親善と国際間の平和を増進すること」は、一般の人たちに対して重大な関心を与えることを意図したものである。

綱領第6条とその前にのべられている五つの条文との間にどのような関係があるのか、ロータリー運動の力として、どのような効果をもたらすのか、個々のロータリアンやロータリークラブはどのようなようにすればいいのか、組織としては、一般的にどのような活動をしたらよいのかという質問をしばしば受ける。

綱領第6条の起源

説明の前置きとして述べておかなければならないことは、ロータリー

の綱領第6条は、ロータリー運動の元来の目的の中にはなかったということである。何年か経った後に、国際的な組織としての機能の中に、明確に定義された国際的な目的としての綱領第6条が、その前にのべられている五つの条文に追加されて実現したものである。「ロータリーの奉仕の理想に結ばれた全世界の実業人と専門職業人の親交を通じて、善意と国際間の平和の増進を援助すること」という国際奉仕の綱領が付け加えられた決議案の原文は、1921年に、エジンバラ国際大会に提案された。

ロータリーは「理解」にすべての基礎を置かなければならないという起草者の考え方から、定款の中で、「善意と国際間の平和」の前に「理解」という言葉が置かれて、わずかに修正されただけで、翌年のロスアンゼルス大会で最終的な枠組みが作られて採択された。「すべてを理解することは、すべて許すことである」というフランスの諺がある。あなたの仲間のことを知って理解することが、ロータリーの第一歩であり、仲間を理解することこそ、善意と更なる親睦と奉仕をもたらす方法なのである。

しばしば指摘されてきた通り、綱領第6条は、多分、他の5条のよう

にロータリー運動の特徴的なものではないかも知れない。多くの組織が、理解や平和や善意を深めるために存在していることを表明しているし、多くの組織が、国々の間でそれを深めるためのいろいろな方法を模索している。従って、平和と善意を促進することを使命にして、国際化を進めるために設立された世界的な組織は、数多く存在するのである。

共通の目的を提唱し、共通の事業に従事する世界の³⁵以上もの国々で構成されているロータリークラブの活動である国際ロータリーは、文字通り、個々のロータリアン間の理解によって善意と平和に寄与しているのである。外国のクラブを訪問して挨拶を述べたり、会員たちと握手したり、バナーを手渡したりする個々のロータリアンのすべては、決して過小評価すべきではない綱領第6条を達成するために、何らかの貢献をしているのである。ロンドン、ニューヨーク、パリのような、世界の中心地にある大規模クラブの通常の例会における歓迎の嵐は、遠い国からやってきたビジターを迎えるためのものであり、友好と奉仕を称える証でもある。

最も誇るべき特徴とも言える心の安らぎと親切心を推し進めることに

よって創り出された世界的な親睦を象徴するために実践してきたいろいろなことが、ロータリーの信頼につながっていったのである。ロータリーの国際大会や地区大会は、多くの地域から集まってきた、あらゆる種類の人々の集会であり、親睦の精神は、彼らの心の中に際限なく広がっていくものである。あらゆる国からやってきた講演者が、異なったさまざまな言葉を使って、奉仕の理念を個人の事業生活や社会生活に適用するためのメッセージを述べる。そのメッセージは、すべての国のすべての人たちが従うべき理念であり、その理念の達成を目指すことによって、世界平和が達成される普遍的なものなのである。

戦争の根本的原因

しかしながら、ロータリーは、異なった国に属していて、たまたまお互いに訪問する、友好的な感情と動機を持った親しい仲間の集団に過ぎない。そのような活動を行っていただけでは、如何なる二国間の戦争の危機を回避しようとしてもまったく無力である。平和や善意を提唱する

国際的感覚を持った組織による、懸命に戦争を阻止しようとする力が、いかに小さいものであるかは、大戦がこれを証明している。大戦の直前には、交戦国間のあらゆる種類の人々による相互訪問が行われ、公式の懇親会の席上、友愛に満ちた心の内が繰り返し述べられた。相互訪問はまた、教会や実業家や専門職業人の業界、議会、報道の代表者の間でも行われたし、いろいろな国で国際会議が開催された。万国博覧会は、ほとんど毎年のように開催されたが、戦争を抑止する実用的な方法として、有益な効果を發揮することは出来なかつた。

戦争の原因は表面下ずっと深くに潜んでおり、もし平和を保つために何か実効的なことをしようと思うのなら、根本的な手立てを講じる必要があることを、すべての国における世論にしなければならぬ。国際的な戦争の根本原因は何であろうか。ロータリーの奉仕理念のどの部分が、戦争を根絶するのに役立つのだろうか。私達の究極の目的を、何とかして少しでも国際関係の分野に反映させるには、どうしたらよいのだろうか。適切に理解された奉仕理念が、自らの職業に対する個人個人の考え方を高め、その力を素晴らしく發揮することや、職業倫理を高めれば競

争の代わりに協力が生まれ、取引関係における正直さと相互信頼が生まれてくることや、社会生活に奉仕理念を適用すれば、公平無私な市民生活による公共のための有益な活動や、それに共鳴した市民たちがチーム一丸となった精神で高められることや、他の人々の考え方を理解するためには、知り合いを広げ、皆と親睦を深めることを、進んで毎日の生活習慣に取り入れなければならぬことなどが、ロータリーの文献の中に書かれている。

世界の市民として生活をする上で、そのような現実的な人生哲学の真の効果とは、いったい何なのであるか。個人的立場上、ロータリアンでない人に比べてロータリアンは、戦争と平和の問題に対して、どれほど異なった関係にあるのだろうか。クラブはこの問題についてどのような特別な関係があり、国際ロータリー自身はどうなのだろうか。

戦争は争いであり、戦争によって報われるものは何もないという、大きな特徴を持っている。戦争の原因は、現実の利益を独占し、他国の犠牲の下で自らが支配しようという欲望でもある。人類は昔からずっと生き残りをかけて、戦争を繰り返してきた。戦争とは、人種対立や誤解が

根本的な理由ではなく、現実や空想上の利害関係の対立によって起こるものである。国の利害関係は、その国の経営管理、内閣やその背後にある議会、金融や、マスコミや、商業上の利害関係であり、それを戦争によつて手に入れようと主張する考え方である。戦争をするか、平和を保つかのすべては、国の指導者の考え方と道徳的基準如何にかかっている。法律や力によつてそれを回避する方法が見つかるのだろうか。そして、その判断基準は、正義に基づくべきなのだろうか、それとも力に基づくべきなのだろうか。

政治におけるロータリー理念

ロータリアンは、零細企業、大企業にかかわらず、奉仕理念をその基盤としている。ロータリーには、小商人もいれば豪商もいるし、零細な土建業者もいれば巨大な力を持った建設業者もいる。また、小役人もいれば国の高官もいるし、子供たちの学校の教師も世論を喚起する教育者もいる。ロータリー理念が大きく政治に影響を与えてきたのは、間違い

のない事実である。1021年に、バッキンガム宮殿で開かれたガーデン・パーティで、ジョージ国王陛下が、国際ロータリー会長に、「私自身はロータリアンになれないだろうか。」と述べたところ、「国王陛下。〔王〕という職業分類は開放されています。」と答えたという記録が残っている。セントルイス国際大会で、ウォーレン・ハーディング前大統領は述べている。「政治家は彼らの問題を抱えているし、政府も同様である。しかし、もし、全世界にロータリー精神を植え付けて、それを実際に適用することが出来たなら、人類の将来に大きな間違いを犯すことはないだろう。」

前ドイツ駐在日本大使、ロンドン駐在全権大使を勤め、1924年のトロント国際大会の代議員である日本人ロータリアン、宮岡杖次郎氏は、ロータリーに関してこう述べている。「我々の団体の主権には国境が存在しない。もし我々の特徴的な考え方と同じ考えで、政府が行動すれば、国際的な問題などまったく起こらないだろう。」

英国財務省の臨時金融経済諮問委員を勤めた、政治経済学者ジョージ・パリッシュ卿は、ロカルノ条約について、「超我の奉仕というロータ

リー標語が、ロカルノ条約を成功に導いた最大要因である。」と述べている。

オースティン・チェンバレン卿は、「彼らは自分たちの要求を述べるのではなく、自分たちが貢献するために、その場所に赴くのです。」と大会で述べている。そして、「もし全世界に、ロータリアンのモットーが広く認知されていなければ、これらの政治家たちは、決してその精神に出会うことはなかったに違いありません。」と、付け加えた。

ロータリーのモットーは、スペイン国王、ムツソリーニ閣下、イギリスの対立政党の首相であるバルドウイン氏とラムゼイ・マクドナルド氏などの、多くの国の最高指導者たちからも支持をうけて、彼ら自身が堅持すべき活動上の原則として、その性格を変えていったのである。

このようにしてロータリーのモットーが広まっていったことは、ロータリーの国際的な主張が人々に認められ、政治活動における基本原則になったことを意味する。これは、世界的に事業を営む指導者が、親密な個人的接触を図ることによって達成したことであり、綱領第6条を遂行するためにロータリーが貢献すればするほど、その達成度は高くなつて

いくのである。

ロータリアンは、個人的、職業的、社会的な生活だけではなく、国際的な生活にも、超我の奉仕のモットーを適用すべきであることを覚って、世界の政治にもそれを当てはめようという、特別な立場にいたのである。モットーの意義は、単に理念を表しているだけではなく、もつと深遠なものであり、最終的に達成しなければならぬ意志を表しているのである。

ロータリーと国際連盟

ロータリアンが判断すべき最初のことからは、何よりも先に己を律することであり、次に己の職業を律することである。三番目、即ち究極には、地域社会を律することである。結論として、決議34に表明されているロータリーの原則は、新しい機関を作ったり、重複した機関を作るよりも、既存の機関と協力することによって、この件に関する団体活動をするのである。ロータリアンは、政治、すなわち激しい意見の衝突

や抗争の計画や個人攻撃の論争には関わるべきではない。しかし、ロータリアンは国の政府のために制度を作ったり、法律を整備することには関与すべきであり、それが不可能な場合でも、少なくとも法律を遵守させること位には関わるべきである。

国際関係の混乱に対処するために、協力の原則を表明するために存在している制度こそ、善意に満ちた理解と平和に賛同し、これを達成したいと望んでいる、すべての人々にとつて重要な制度なのである。このようにして、ロータリアンは、国際関係を調和させるために役立つことを心から願ひ、超我の奉仕の精神を以つて会議に臨むことによつて、成功裏に会議が進むように、自らの国を代表して外国で最善を尽くすことが期待されているのである。ロータリアンとして国際関係についての基本を知ることが、最低限の義務であることを教えられてきたはずであり、地元のクラブの会員として、そのような教育を受ける責任があることが指摘されている。もし地元のクラブが、政治に関与することに反対する人たちから成り立っているならば、問題として取り上げるべきではない。もし政党政治家はその政策を押し付けるならば、ロータリアンたるも

のは、自らのロータリークラブを危険に陥れないためにも、それを拒否するよう努力しなければならないことは当然である。ロータリーが団体として影響力を及ぼさなければならぬことは、国際協力という主原則に基づいて一般大衆を教育するための機関として機能を発揮することに、クラブを役立たせるべきであると共に、奉仕というロータリーの原則を、世界的な活動の中に可能な限り取り入れることである。

善意に対する現実的な援助

「国際理解と善意と平和」は、単に戦争を防止するための方法として、教え込むことがらではなく、そのことがら自身のために、教え込まなければならぬことである。我々は、政治の領域とは関係なく、世界の理解を更に深めることを望んでいる。誤解の原因は確かに存在する。旅行や交流や文化や貿易の自由の制限が国々の間に存在することは、不安と利己的な心によるものであつて、苦々しい感情を引き起こす原因ともなっている。たとえば、一時的な原因で、何れかの部門における制限が必要

であつたとしても、ロータリアンはこれらの煩わしい制限のない世界を望んでいたのである。人々は、もつとよく理解しようという意志の欠如によつて、よく理解することを避けるものである。言葉を学ぶことは、少なくとも、我々がお互いの言語の基礎を理解する上で、親睦を深める大きな要因である。通貨、度量衡などの異なつた基準に固執することは、貿易や通商をより困難にするものであると共に、国際取引の問題に関する前途を、頑固な保守的なものにすると共に、孤立化させるものである。

職業倫理と世界平和

国際的な分野に、ロータリーの綱領第10条、「実業と専門職種の高い倫理基準」を適用しようという動きが、最近になつて見受けられるようになってきた。同業者組合における道徳的理念の浸透は、行動規範の全般的な高揚につながり、その結果として、明らかに誤つた慣習は根絶された。そこで、業者同士の競争の代わりに、業者と一般大衆が協力する結果として、信用が高まつてきた。ロータリーの考え方は、また、経

営者と雇用者との関係を改善するためにも機能しているのである。それでは国家間の経済関係を改善するためにはどうすればよいのだろうか。

イギリスのロータリアンによる地区大会が、1916年一月にロンドンで開催されて、一つの重要な決議が、次の通り採択された。

「国際連盟の関心は、世界の国々の産業の様々な分野に適用する商慣習の基準を比較研究することによって、それを指導していく機関の必要性を喚起することである。従って、国際的な誤解や反感の原因になるような慣習をすべて排除することが可能であり、組織された産業のさまざまな分野に、より大きな道徳的な責任と協力を確保するという同意が得られるのである。」

国際協定によって、非道徳的なものとして取扱うように、特別に選ばれた慣習は、下記の通りである。

贈収賄

不正取引

市場買占め

おとり商法 利益を得るための他の国の法律無視

契約不履行

商標、デザイン、特許権などの侵害

贈収賄

ロータリー自体は、そのような悪い慣習を取り除くために重要な意味を持つものとして、特に「より高い職業倫理を構築する」ことを勧告している。この決議が採択された後開催された国際連盟の経済会議では、国際通商関係で誤解の原因となる多くの問題の処理や、不公正な商習慣に対する措置や、ロータリーが有益な証拠を示すべき立場にあることが期待されていることなどの議題が提起された。R I B Iの会長であるシドニー・パスコールは、特に贈収賄に関するスピーチで次のように述べている。

「賄賂は国際平和を脅かす。もしあなたが他国の国民に賄賂を使ったとしたら、あなたは彼らからの尊敬を失うに違いない。もし他国の国民

が、あなたの顧客に賄賂を使って、あなたの取引に損害を与えたとしたら、あなたは彼らに敵意を抱くに違いない。賄賂がはびこって、取引が不可能なれば、あなたは不公正だと感じるに違いない。」

贈収賄は取引上の非道徳的な慣習である。世界中のすべての国で、その廃止を確約することは、ロータリーにとっての当面の目的であり、理解と善意と国際平和への道を達成するための機会でもある。アメリカ、ドイツ、スウェーデン、イギリスやその他の国々では、贈収賄は処罰の対象になってきているが。その他の多くの国々では、その法律は未だ承認されるに至っていない。贈収賄を処罰している国のロータリアンは、その法律を未だ導入していない国のロータリアンに、影響を与えることが出来るのである。

ここでは充分説明することが出来ないが、世界中の実業界には、それ以外にも非道徳的な慣習が存在しているが、ロータリークラブは、国際的共同活動の観点から、これらのことを調査するのに役立つことが出来るのである。

不道德な慣行

政治におけると同様に、経済においてもよりよい国際関係をつくるために活動しているすべての団体の基本理念には、道徳的な動機があることは間違いない。ある国の貿易業者の一部にある非道徳的な行為は、いともたやすく戦争の原因になり得るのである。一例として酒の密売があげられる。ある国では禁酒法が制定されているが、その一方で他の国では禁酒法が認められていないこともある。もしも禁酒法がその国の法律であるならば、それを破るために共謀することは、別の国の貿易業者にとつて非道徳的なことである。そのことに怒った政府がとる手段は、いとも簡単に事件に発展して、もし慎重に扱われない場合は、戦争にまで発展し兼ねない。我々は治療よりも予防を望んでいるのである。

契約に対する不信は、低い道徳基準によつて起こる国際的な悪意のもう一つの原因でもある。高い道徳基準に基づいた慣習を守っていることを自ら誇っている国々は、偽善者の態度をとるべきではなく、他の国の人たちにも同じようにさせようという道徳的な勧告を試みるべきである。

う。

事業により高い道徳を適用しようというロータリーの国際交流の流れを通じて、ロータリーは、奉仕の理念に結ばれた事業と専門職種の人々の世界的な親睦を育み、理解と善意と国際平和の理念を達成するために、一人この道を歩むのである。

第7章 ロータリーの歴史

我々は理念の上からロータリーを論じ、個人生活、職業生活、市民生活、クラブ生活、職場関係、国民としての生活において実践すべき数々の例を示してきた。しかし、ロータリーは、単に理念だけではなく、複雑な仕組みを持った組織でもあるので、その活動について、さまざまなことを話すべきだと思う。そのような話を抜きにしては、我々の任務を完全に果たしたとは言えないからである。しかし、何処から始めるべきだろうか。その答えは、最初から始めることであろう。ロータリーの最初の中心地はシカゴであり、今日に至っても、その座は変わらないのである。

生みの親と創立者

ロータリーの生みの親は、大学生活に引き続いた数年間を、世界中に

旅して、多くの国で多くの人々との知り合いを作った、シカゴの弁護士ポール・ハリスである。彼は、アメリカに戻った後、その街で開業するためにシカゴにやってきた。彼は、この街で、友人を大切にせず、どのようにしてお金を儲けるかや、どのようにしてお金を使うかを考えることが最大の関心事である人口の密集した大都会に、見知らぬ人として集まってきた多くの人たちを待ち受けていた、平均的な知識人のみんなが感じていた孤独という、同じような運命に出会った。この環境こそが、会員が、単にお互いに知り合いになるだけには留まらないクラブを作っただけではなく、地域社会に役立つことを証明する手段を計画するという考え方を生み出すと同時に、彼らの仲間に対して奉仕をすることに熱中させたのである。

ハリスは直ちにこの考え方にとりつかれて、シカゴで出来た僅かばかりの友人たちに説明した。彼らの熱意に元気づけられ、その要望を果たすために、1905年2月23日に、クラブの最初の例会が、クラブ創立者の一人の事務所で開催された。この時以来、例会は、順番に、各々の会員がホストの役を演じながら、自分の事務所で開催された。

しかし、数週間も経たないうちに、現実には、会員が非常に増えてきたため、ホテルやレストランで例会を開催する必要性が生じてきた。

名前の起源

その後、新しいクラブについてのいくつかの名前が、ハリスによって提案された。そのうちの 하나가、会員の様々な事業所を回り持ちしながら例会を開いていたことに起因するロータリーであった。今日、ロータリーという言葉は、実業家と専門職種の人々の交流を通じて、よりよい商習慣と高慢な理念を表す言葉となっている。事業所から事業所を巡る例会は、興味深いだけでなく、他の仲間の事業について学ぶ機会を会員に与えて、教育的なものであることが判ってきた。このようにして、様々な職業の会員が、自分の職業の奉仕について語るといふ、今日のロータリークラブの特徴の一つになっている慣習が出来あがったのである。

インタービューに際して、ハリスが答えた実際の言葉を、そっくりそのまま記載してみたい。

「ロータリーの創立に当たって、私が組織化した会員の社会的、事業上の関心よりも、もっと多くのものを期待していたかどうかとか、今日、我々が知っているような、ロータリー活動を発展させていく見通しがあったかどうか、というような質問をしばしば受けた。」

親睦の喜び

「最初に言っておきたいことは、私は、事業上の利益をロータリークラブの会員にもたらすことに、個人的な関心を抱いたことはなかったということである。私はもっと別の考え方にとりつかれていた。クラブの親睦という側面は、常に私にとつての最大の関心事であった。私にとつて、楽しみは常に最愛の恋人のようなものであり、他の人々と接するとは、究極の喜びでもあった。しかし、そのようなことは当たり前のことであつて、ロータリーに関する私の重大な目的の一部にしか過ぎないものである。ロータリーが唱える倫理に関する将来の展望は、私が楽しんでできた親睦や楽しみといった私の経験よりも、めまぐるしい速さで展

開し始めているというのが、私の本音である。私は、私の親友であり、経営学の学校の創立者であり、奉仕こそが、事業における真の成功の基礎であり、大いに影響を及ぼすものであることを、最初に伝えた人、アーサー・シエルドンの存在を指摘したい。」

「私は、ロータリーの組織の中で、これまでは単なるスケッチだけの存在に過ぎなかったものが、素早く現実の絵に変わりつつあることに気付いた。」

ロータリー宣言

「職業道徳の高揚によってロータリーの存在を実証する、確実な最初の一步は、このようにして起こった。私は、シカゴ市外におけるこの運動の拡大について、先ず最初に、サンフランシスコに新しいクラブがつくられ、カリフォルニアの他の都市に広がっていったことに関心を抱いている。サンフランシスコ・クラブの、創立者の一人であるアーサー・ホルマンは、シアトル・クラブの設立を手がけ、その街における設立準

備をロイ・デニーに一任した。ロイは崇高な理念を持った素晴らしい仲間であり、同じ街のアーネスト・スケールと共に手を携えて、クラブを設立した。これらの二人は、三人目の人物ジョー・ピンカムを得て、ロータリークラブが全く利己的な目的から脱却して、他の目的に転換する方法を、夜を徹して、彼に納得させることに費やした。討論の結果、スケールとピンカムは、素早くロータリーの真の目的となる考え方の本筋を了解し、現在、ロータリー宣言として表明されている基本文章を書き下ろしたのである。」

最もよく奉仕する者、最も多く報いられる

「この宣言は、これが採択された翌年のポートランド国際大会に先だって、承認されたものである。大会の講演者の一人であったアーサー・シエルドンが、彼の演説を **He profits most who serves best** という言葉で結んだ。この一節は大きな共感をもって受け止められ、ピンカムは、承認を得たロータリー宣言の最後にその言葉を付け加える動議を提案するために、自分の椅子から立ち上がった。」

「このようにして、ロータリーとは倫理的な活動をする組織であるこ

とが、世界中に知れわたり、職業分類制度の本当の意味が、以前にはなかつたものとして現実化したのである。我々は、かつて見たことがなく、永遠に使うことが出来る組織の一つを、最初に作り上げたのである。今、我々は、ロータリーにおいて職業分類されている人々が、事業と専門職種における超我の奉仕の理念を説いている姿を見ることが出来る。その上に我々は、各々のクラブ、特にシカゴ・クラブだけではなく、我々が組織化した世界中の国の多くのクラブに、大勢の会員を得るために、あらゆる方向に我々の地域を広げようと模索しているのである。我々は地域社会を良くするためには、実際に何をすれば良いかを知っているのです。ロータリーの組織を更に広げていかなければならないのである。」

「クラブが他の国で結成されはじめて、我々が個人で対処するよりも、更に大きい役割があることが判った。我々は、国と国、国民と国民との間の役割を担い、いまやその役割を更に発展させていかなければならないのである。」

全米ロータリークラブ連合会結成

1910年までは、クラブ間の公式なつながりは全くなかったが、同年に入って早々に、既存クラブがつながりを持つことが決議されて、全米ロータリークラブの理事が指名されて、みんなが集まって、大会の詳細が練られた。その年の8月にシカゴで開催された大会で、全米ロータリークラブ連合会が結成された。ロータリーの最初の全国大会に当たるこの大会には、当時組織されていた15のクラブのうちの14クラブを代表する約40名の代議員が出席した。この会合に参加した代議員の一人は、80年後には世界中には1,000のロータリークラブが組織されているに違いないという予測を立てたが、その予測は、12年も経たないうちに達成されたのである。

ロータリー宣言の採択

2回目の全国大会は、1911年にオレゴン州のポートランドで開催

された。大会に先がけて、委員会は、ロータリーの個人的な様々な考え方を、具体的な原則の声明として公式化するように命じられた。委員会はシアトルのジェームス・ピンカムが委員長を務める委員会によって起草されたロータリー宣言を承認し、報告書として提出して、その宣言が大会で採択された。この大会で、シカゴ・クラブの会員であり、シエルドン学校の校長であるアーサー・フレデリック・シエルドンは、**He profits most who serves best** という一説を含んでいる文章を提案した。会場からの動議によって、ジェームズ・ピンカムは、この一節をロータリー宣言の最後に付け加えた。後に、この一節はロータリーの公式標語になった。

この文章が、ロータリーに関連して最初に使われたのは、1年前のことであって、ロータリアンであるシエルドンが行ったシカゴ大会の最終日の晩宴会における演説の中であった。「ロータリー宣言」は、すべてのロータリークラブの根幹ともなる原則を簡潔に述べたものである。

道徳律の採択

1913年に開かれたバッファロー国際大会において、委員会は、ロータリーの既存の原則と慣習を成文化して、これまで職業に関して公表されたいかなる基準よりも、高い理念を持ち、厳格に適用すべき基準となる、ロータリアンのための職業倫理訓を策定する権限を与えられた。

1914年のヒューストン大会に、アイオワ州スー・シティ・クラブのJ. R. パーキンスが委員長を務める委員会が立案した道徳律という形で、その報告書が提出された。これは大会において、ロータリアンが討論するた

めに提案されたものであり、1年間、クラブ内で検討されたが、新たな提案を付け加えるという動きは全く起こらず、1915年のサンフランシスコ大会で、事実上、原型のまま、ロータリー道徳律として採択された。

1911年にロータリー宣言が、組織としてのロータリークラブの原則、目的、見識の概要として採択され、それから4年後に、個々のロー

タリアン同士の関係における、原則と慣習の根源を定める道德律が採用され、
たのである

限定会員制度

限定会員制度の起源

シカゴ・クラブの最初の4名の会員は、各々異なつた職業に就いていた。最初のクラブの会員制度は、クラブの中には、同じ事業または専門職種を代表する者は一人しかいないという原則に基づいて運営されてきた。ロータリーが拡大を続けた年月の間も、この元来の制度を守ることによつて、この最初の基本的な考え方の類まれな価値が、充分に実証されたのである。他の組織は、その会員名簿に何千人もの会員が載っているのに比べて、ロータリークラブはほんの僅かの数しか載っていない。数において一見弱そうに見えるが、ロータリーの現実の力は大きなもの

がある。公式文書に記載されている、限定会員制度の利点の幾つかは次の通りである。

限定会員制度の利点

(1) 代表者として効果的な会員制度……この制度は、地域社会を代表する制度であるが、会員間の知己や親密な友情を深めることが困難になるほど、会員数が多くなることは有り得ない。

(2) 一致団結した活動の容易さ……クラブにおける共同活動は、大き過ぎて厄介なほど会員を抱えているクラブよりも、ずっと容易である。

(3) フォーラムで理想的な討論が出来る……クラブが、各々の事業や専門職種を代表する一人の会員から構成されているので、公共問題や、一般大衆や様々な取引上未解決なすべてのことがらを考えた

り、討論するために、理想的なフォーラムが出来る。

(4) 派閥化の防止……一つの職業または関連職業が、クラブを支配するほど十分な力を持った数になり得ない。

(5) 不良会員を追放する方法の策定……この計画は、クラブが規則的な出席と活動的な参加を強く要請することが可能か、それとも、同じ業種の誰かに、会員身分を引き渡すかという、会員身分を決めたり、維持する上での基本を定めるものである。

(6) 個々の会員に対する利益・事業と専門職種に従事する人は、他の事業や専門職種に従事する人たちから、より思いやりのある理解を受けることが出来る。このようにして、自らの日常的な事業という、狭いわだちから大きく飛躍することが出来ると共に、他の方法では手に入れることが出来ない指摘や情報を得ることが出来るのである。

イギリス諸島のロータリー

ロータリーがイギリスに根を下ろしたのは、1911年のことである。アメリカから帰国した実業家たちが、ロータリーの経験を報告し、イギリスのクラブも、同じような原則で運営すべきであることを提案した。最初は、試験的なやり方に過ぎなかったが、すぐさま情熱家が組織作りの計画を携えて、舞台に登場した。クラブ設立は、ロンドン、マンチェスター、ダブリンに始まり、ベルファスト、グラスゴー、エジンバラ、リバプール、バーミンガムと続いた。

1913年には、イギリスのクラブは8つとなり、イギリス・ロータリークラブ連合会（BARC）の結成を正当化するのに、十分な数となった。この連合会は、1913年10月にリバプールの会合で結成され、1914年5月4日にロンドンで、正式に成文化され、1914年6月のヒューストン国際大会で、国際ロータリークラブ連合会によって公式に認められた。

イギリスにおいて設立の動きのあった数年後に、第一次世界大戦が勃

発したことによって、国家の緊急事態における全国的な活動の機会が訪れた。各々のクラブは、直ちにいろいろな種類の愛国的な活動を手がけた。二つのスコットランドのクラブが率先して立ち上がり、軍人たちの世話を始めた。アメリカからやって来た軍人のための海外のクラブとして、イギリスのクラブは奉仕活動を開始し、それを続けたのである。傷痍軍人のための募金、救急車の整備、ベルギーからの避難民のホームステイ、傷痍軍人や臨時警官の雇用などが、いろいろなクラブによって組織的に行われると共に、戦時貯蓄組合の結成、休暇中アメリカ軍人の慰問など、正義感の上からも効率の上からも、すべての活動は成功を収めた。ロータリーは、団体的に引き受けた奉仕活動において成功を収めたのである。

B A R C（現在の R I B I）の役員の指導のもとで、イギリスのクラブ数は大幅に増え、毎年のように、ダンス単位で新しいクラブが加わっていった。1921年にエジンバラで開催された国際大会の時には、英国とアイルランドのクラブは 48 にも達していた。国際大会の後に、R I B I の本部はロンドンに移され、その組織の足場が永久的に固められ

た。教育的な運動が国をあげて進められ、引き続いて国際大会の刺激を受けて、12ヶ月の間に、ロータリークラブの数は一〇〇近くにまで増えた。

拡大作業は中断されることなく継続的に進み、毎週のように、新しいクラブの設立が報告されながら、時が経過した。この本が発行される時点で、イギリスとアイルランドのクラブ数は260に達しているが、まだまだ拡大の余地が残されている。大きな都市でも小さな町でも、そこに存在するロータリークラブによる社会奉仕や職業上の親睦の結果が実っていない場所はないと思うし、その前提として、責任と適正さを備えた事業と専門職種の人々によって構成されていることが、すべてのクラブに適用されることを暖かく見守ることがRIBIの方針なのである。

小さな田舎町、大きな工業地帯、港町や海岸のリゾートであろうとも、連合会の代表者が必ず出席する集会では、同じような関心が払われ、同じような方針や慣習が述べられるのである。ロータリークラブには、毎年のように、新鮮な経験や、クラブが伝えてくれる真の価値を持つ理念という知識が増えるという、ロータリーが持っている功徳を教える楽し

い義務を、最も良い方法で機能させる、素晴らしい機会を持っているのである。

海外の活動

ヨーロッパを始め、中央アメリカ、南アメリカ、フィリピン、中国、日本、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカなどの、現在ロータリーが存在する世界のすべての場所におけるロータリーの拡大は、中央の本部が意図的に組織作りをした結果ではなく、極めて迅速な行動と、数多くの幸運な出来事が続いた結果として達成されたものである。ほとんどの例では、設立されたクラブを訪問した会員によって、最初のきっかけが作られたり、またどこか遠く離れた場所にあるその人の居住地で取り上げられたり、ロータリーに興味を持った人たちによって準備されたものであった。ある場合には、この熱心なロータリアンは、正式手続きを完成することやクラブを設立することに関する、国際ロータリー理事会からの権限が与えられたり、またある場合には、スペッシヤル・

コミッシヨナーが任命されている。さらにある場合には、アメリカやイギリスやカナダを訪れた実業家が、滞在中に、ロータリークラブを訪問して、興味を覚え、自分の故郷に帰ると同時に、そこでクラブを設立する行動を起こしたケースもある。

最も成功したスペツシヤル・コミッシヨナーとして、1921年にオーストラリアとニュージールランドを訪れて、それぞれの首都にロータリークラブを発足させた、二人のカナダのロータリアンがあげられる。同じような行動は、南アメリカにおいても見られ、処女地の開拓者としての一人の個人的行動として蒔いた種が、今や健全な大農場にまで成長したのである。

ヨーロッパ上陸

ヨーロッパ大陸において、いくつかの孤立したクラブを設立した後、スペツシヤル・コミッシヨナーは、チューリヒの事務局から、全体的な活動を援助するように命じられた。彼の活動の結果が実つて、ヨーロッパ

パのロータリーは、新世界と旧世界とのバランスがとれるほどまでに、拡大が進んでいった。ほとんどの場合には、国や領域に相当する地域に、地区を編成するのに十分な数のクラブが作られて、地区ガバナーという国際ロータリーの通常の機構を通じて、その管理が委任された。国際ロータリー理事会の援助の下で、ヨーロッパ地区大会がブリュッセルとチューリヒで開催され、近年、武力衝突や外交上の抗争を引き起こしている、さまざまな異なった言葉を話すさまざまな異なった国の人たちに、ロータリーの理念を適用することが試みられた。ロータリーの雰囲気は、この方法以外では絶対不可能な方法を、いろいろな国の人に伝え、利己主義よりも犠牲を、内輪もめよりも調和をとるという精神に基づいて、人間関係の表面下に横たわるこれらの問題について議論することを可能にしたのである。

ロータリーがヨーロッパに上陸したことによる、最初の最も重要な出来事は、1927年の夏に、ヨーロッパの地、オステンドで国際大会を開催するという決定であった。この国際大会は、文化や経済活動の主要な部門を代表する人々に、ロータリーの全世界に対するメッセージを伝

える機会を、初めてもたらしたのである。

ロータリーの組織

そのようにして始まり、そのような方向に向かってロータリーは成長したが、その組織は、一見の価値があると共に、不可思議で不可解な様相を呈したものである。組織の単位はそれぞれのクラブであり、クラブ自身が、この複雑な組織の構成員である。少なくともクラブである限り、最初から、厳密に定義された形に従って作られていなければならぬ。慎重に選ばれた会員の名簿。正しく構成されている理事会（イギリスではしばしば Council と呼ばれる）。一定の場所における例会。幹事の事務や記録や文献やファイルの保存。会計の事務。クラブが要求する、親睦、プログラム、教育、社会または市民奉仕、余興、広報等々の委員会。そのような固定的な内部組織を持っているクラブが、執行部と直接的、間接的に関連を持ちながら、設立されていったのである。

クラブと国際ロータリー本部の間や、クラブと正式に任命された代議

員による年次大会の間には、直接的な関係がある。厳密に定義すれば、クラブと国際大会の間には何の関連もない。クラブは、当然かつ適切な事案に対して、決議をするように動議をだすことが出来る。会長を指名し、国際ロータリーの理事役員として奉仕するために指名された人たちを選挙することが出来る。国際大会の場に居合わせたという個人的な手柄にもなるだろうし、外部の世界の人たちから賞讃をうけながら、自分の地位を離れて、高い地位にいる役員に与えられている名誉ある特権を楽しむことが出来る。何がしかの奉仕活動を達成したクラブに対しては何がしかの効果的で素晴らしい記録を作ったという感慨をもたらすかも知れない。国際大会や地区大会を主催することを、その町に申し込むことは、別な方法を駆って、ロータリーの国際的な舞台上で素晴らしい役割を果たすことも出来ない。

地区組織

クラブが存在し、クラブ・ライフを営んでいる地球全体よりも小さな

世界が存在する。それが地区や地域である。地区や地域は、国際ロータリーが、その目的を達成するために設定した、補助的な管理形態である。地区は理事会が決定した多数のクラブから成り立っており、その境界は、アメリカの州、カナダの州、ヨーロッパの国家、オーストラリア大陸、ニュージーランドの領土、南アフリカの州と同じくらいの大きさがある。地域は国単位もしくは、幾つかの地区が存在する地理的に近い国々のグループで構成され、理事会または管理委員会と選挙された地域役員によって構成されている管理母体によって管理されている。

現在、地区は、地区内のクラブによる年次地区大会で役員に任命され、国際大会で選挙された地区ガバナーによって、国際ロータリー理事会の直接監督下で管理されている。通常、ガバナーは事務局を持ち、クラブに対してたぐい稀な奉仕をする人である。ガバナーの義務は、地区内のクラブを訪問し、その活動を全般的に管理することである。ガバナーは、クラブ役員の会合を召集し、健全なロータリーのやり方を指導し、全体として彼らが前に進むように教育する権限を持っている。従って、ガバナーとして成功することは、国際ロータリーの役員として成功する

ことでもある。国際ロータリー理事会は、ガバナーの義務を教育するために、毎年、シカゴで協議会を召集する。その協議会では、それぞれのガバナーは、国会議員と同じように、またそれぞれの理事は閣僚と同じように指定された席に座る。委員長と委員もまた、特別なゲストや元会長、外国からの代表者、事務局と同じように、これに参加する。協議会は立法権を持っておらず、地区管理のやり方を学ぶために参加するのである。地区ガバナーは、会長や委員長やその他の人たちから、多くの問題についてアドバイスを受ける。国際大会においてその方針が採択された後に、理事会によって立案されたプログラムが実行に移されることに留意しなければならない。

地域管理

地域管理は、唯一、英国とアイルランドにおいてのみ達成された、今なお実験的な段階にあるものである。英国とアイルランドでは、1013年にクラブが結成され、1922年には、BARCとして知られてい

る国内連合会が結成された。その後、国際ロータリー理事会の承認を受けて、全体的な組織に移行したが、全く自国内だけの目的のために、選ばれた理事会による連合会として運営されている。英国とアイルランドの連合会は、複数の国が一緒になった地域として、独自の地区を形成し、連合会の中に地区理事会を設けている。この理事会は、地区ガバナーとほとんど同じような活動をする議長を選挙する。イギリスのロータリーは、外見上独立している点が大きな特徴であり、世界におけるロータリーの標準とは、若干異なっているが、組織上も、自らのロータリー・クラブを健全に発展させている点からも、国際ロータリーを小型にしたようなものに過ぎない。しかし、経緯から見ても判るように、この二つのロータリーの組織は、全く似ていないようにも見えるし、全くそっくりにも見えるのである。区別しようとか、違ったものにしようとかいう意図にかかわらず、同じような方向に向かって進んでいくものである。

時が経つにつれて、イギリスの地域管理は、ロータリーの世界の標準からかけ離れていた、その外見上の独自性と特徴を失っていった。その原因は、自説にこだわった余り、大同団結という考え方に固執した指導

者たちの、国際的な考え方に大きく起因している。

シカゴから遠く離れているヨーロッパの大陸の地区は、創立に際して、自らの連合会と執行部によって地域を組織し、クラブの長所を伸ばしていったのである。国際ロータリーは高度管理をする最善の方法は何かという問題に直面している。従来、理事会は、殆どの場合アメリカ人である会長と、それ以外の5名のアメリカ人と、カナダ1名、イギリス1名、理事会が任意に選ぶことが出来るその他の地域から3名の席を与え、という方式で、国際大会において選ばれてきた。従って理事会は11名の理事によって構成されていることになる。しかし、殆どの理事会開催に当たって、すべての理事選出単位からの代表による理事会が、必要最低限にしか開催されないことや、北アメリカ選出の理事が、当然要求される国際的な性格を失って、アメリカ人以外の理事の指導力を奪っているというのが現実の姿である。

この状況を論理的に述べれば、理事会運営の権限をもっと分散し、さらに、イギリスやヨーロッパだけでなく、もつと多くの地域で、地域管理の形が取られるべきであり、さらに管理運営委員会を作って、その

中に地域から指名された何人かの人で構成された理事会もしくは、最高会議を設立して、彼らに大きな権限と義務を与えるべきであることを示唆するものである。

国際ロータリーの事務局は、理事会を運営し、すべての奉仕活動を実践する責任を持ち、出版物や組織や什器備品について、クラブや地区や地域に奉仕する幹事の支配下にある80名の人たちによって構成されている。事務局本部は、シカゴ市東キュラートン通221番地、アットウエル・ビルにある。

財政

ロータリーはどのような方法で、費用を支払うのだろうか。その答えは、二つの部分に分けて述べなければならない。ロータリークラブは、クラブによって異なった額の、クラブに対する会員の会費という方法で支払う。大都市では、会費が高い場合もあるし、田舎では10ドルとか2ギニーのように安い場合もある。新入会員は、如何なる場所でも、入

会金を支払わなければならない。国際ロータリーの資金は、会員一人当たりについて一定額の、半年毎に支払われる、会員であるクラブの人头分担金によって支えられている。最近、その額は3・5ドルから4・5ドルに変更された。

地域管理のために独自の定款を持っている所では、国際ロータリーへの上納金は、地域管理の目的のために集められる、一定の割合の会費を維持するために、定款に従って、管理を許された本部の管理と権限の下で集められる。しかし、このやり方は、大同団結しようという一般的な傾向によって、単一の財務管理に転換されつつある。多分将来は、全世界のロータリアンが負担者であるという建前から、本部の基金に寄付する義務を全うするという総合的な管理方法に急速に移行するという、世界的な流れに変わっていくに違いない。寄付するという特権を与えられることは、管理することに参加する特権を与えられていることでもある。

第8章 ロータリーの未来

ある推測

人間の習性には、人間の個性と同じように、自衛本能、生き抜こうという意志、永続性という願望がある。ロータリーの自衛本能の一切は、そのクラブが持っている生命力如何に懸かっている。もしあるクラブが失敗すれば、それはロータリーの核となるものが失敗したことであり、そのような失敗例が起り得ることは、すべての例で、失敗が起り得ることを意味する。ロータリーの理念からは、失敗は絶対起り得ないはずである。もし、一定の個人のグループが、クラブを持ちこたえることが出来なければ、同じ場所で、元のグループの会員が何人か加わって別のグループを作るべきである。それにも拘わらず、失敗が予測される時には、真の原因を捜す必要がある、それが見つかった時には、その根本的な失敗の原因は、ロータリーの理念にあるのではなく、その構造上の問題とか人間関係のようなものに起因していることを明らかにすべき

である。

ロータリークラブの構造は歯車に象徴されている。歯車の有効性は一枚一枚の歯にあり、ロータリーにおける歯は、職業分類に基づく会員である。欠陥のある会員を沢山持つているクラブは、欠けた歯が沢山ついている歯車のようなものであつて、そんなものは何の役にもたない。

それならば何故、ロータリークラブが消滅したり、有意義な活動をするために必要不可欠である活動的な会員を確保することに失敗するのだろうか。この質問に答えようとすれば、我々は、すべてのことに対する説得力の弱さを正当化するという、ロータリーに対する批判の本質に到達せざるを得ない。我々が経験してきた批判は、自分のクラブを維持していく上で、個々の会員が当然すべきことをしなかつたことである。いくら多くの人たちが、ロータリーの根本的な理念を信奉していたとしても、彼らが属しているクラブが、彼らが表明した通りに、これらの理念を実践することに気付かなかつたという間違いを犯したのだから。いったい何が間違つていたのだろうか。

限定会員制度の根拠

それは、たぶん、例会の場で提案されたものでもないし、卓話者がささやいたり、指示したり、話し掛けたものでもないだろうし、いわんや、出席率の悪さや親睦の弱さやロータリー精神の欠如から起こるものでもない。ロータリアンとして適切な真の代表者が欠席することは、ロータリーの定款上の根本的な弱点に、大きな原因があると思われる。

一人一業種をなぜ金科玉条にするのかとか、このロータリーの理念は、全会員のすばらしい基本条件として生き続け育まれるべきものなのだろうかと訊ねる人がいる。この点を問題にする批評家は、個々のクラブの問題ではなく、全体的な問題に目を転じた人である。

適切な人材がいなかったため、この不思議な出来事が、この町で話題になることはなかったとしても、ロータリーの未来を予言する人によって作られた、この大きく波紋を呼ぶ主張に耳を傾けなければならぬのである。

そして、これはどう考えても間違いであり、全世界に広まっているロ

ロータリーの弱点は数が少ないことであり、職業界に貸与している限定代表制度そのものに問題があるのではないのかということ、質問しているのである。

そこで、ロータリーの未来に関する我々の問題点は、この一人一業種の問題にあるということになる。例会場の拙悪さや、卓話者の質の低下や、会員の親睦の欠如は、修復可能な欠陥であり、これらの問題の多くは、時が経つにつれて改善されるものである。しかし、世界中で最も素晴らしいクラブですら、常に、数多くの利点を排除した職業分類制度に縛られているのである。ロータリーは、いつまでもこの制度に縛られたままで、この制度を改善して、全世界にその力を発揮しようとするのだろうか。そのような質問が、ロータリーを批判する人たちによって投げかけられているのである。

限定会員制度の力

限定会員制度がロータリーの力の源であることは、多くのロータリア

ンが確信している固い信念である。少数精鋭のイギリス正規軍は、いったん要請があれば、素晴らしい能力を発揮する。もし戦争が起これば、その少数精鋭の正規軍が後ろ盾になって、必要があれば、多くの人たちが容易に集めることが出来る。過去の経験は、それを実例として証明してきた。しかし、骨組みに魂を入れるという考え方が欠けていたり、形骸化していたり、旧態依然のままに放置していたり、イギリス正規軍のように、可能な限り大量の援軍を集めようとしなかったり、もうこれで充分だから、これ以上人数を増やそうとしなければ、ロータリーは、これと同じようにはいかないのである。

人数が多いだけでは、充分力が発揮出来ないと言われるが、むしろ、それが弱点になる場合もある。ロータリーの力は、善意のエネルギーで毎日の生活の一部始終を営んでいる、個人個人のロータリアンの力である、よく言われる。もしあなた方が、会員の数に余りにも極端に制限すれば、ロータリーが、世の中を良くするための強力な力となる日を、単に遅らせているという事実を残すに過ぎないのではないだろうか。現在の組織では、たとえ、すべての会員が最善を尽くしたとしても、子供

の生涯にも似た、偉大なる人生の一瞬の域を出ない活動しか出来ないものである。

我々が熟知しているロータリーの究極の目的だけではなく、全世界にロータリー活動そのものがなかったらと考えると、我々、賢明な読者が、今日存在していることは、価値あることだと考えなければならぬ。もし宇宙から来た訪問者が、この〇条の文章を我々に手渡しして、「ここに書かれている条文を説明するので、中心となる人たちを集めなさい。」と言ったとしたら、どうしたらよいのだろうか。

あなた自身の地域社会で、あなたが組織を作ろうとする単位とは、一体どのようなものなのだろうか。綱領は、共通の分母として、奉仕の理念に結ばれた「企業」や「事業と専門職種」や「知己」や「職業」や「事業および専門職業人の親睦」について述べている。従って、確実に提唱者として呼び出しを受けるのは、事業家や専門職種の人々であり、ひよっとして、二番手の提唱者として呼び出しを受けるのは、漁師や軍人や船員や坑夫や鉄道員かも知れない。しかし、実業家や専門職種の人々は、同じ場所や同じ時間帯に、いつでも一緒に集まっているわけではない。

彼らが、同じ場所や同じ時間帯に一緒にいるのは、その他の一般の人々
とである。実業家や専門職種の人々が、取引や市場や同業者の会合で、
同じ場所や同じ時間帯に一堂に会しているのを見つけることが出来るし、
もし許可を得ることが出来れば、その特別なグループにあなたが話しか
けることも可能である。しかし彼ら全体を対象にしようと思えば、その
集会を準備したり、名前や職業を事前に調査する必要があるだろう。

ロータリーの究極の目的を伝えようという我々の使命は、彼らを呼び
集めるために、事業や専門職種の人々の厳選されたリストを作ること
であり、すべての実業や専門職業の代表者が、一つの職種に偏らず適切な
割合を保つようにチェックすることかも知れない。大げさな会合にした
くなければ、とりあえず最初の集まりは、各々の分野から一名の代表者
を呼ぶように制限すればよいし、もし、最初の会合で、集まってきた人
たちの中から適切な反応を示す人が見つければ、この活動の創立会員と
してその人を登録して、将来開かれる会合の計画の中に、そのように手
配すればよい。その計画の重要な柱となるものは親睦と知己であり、適
切な社交的な雰囲気は漂うように、最初の例会を手配することによって

可能となる。

要するに、彼が作ろうとしているものは、我々が知っているロータリークラブと少しも違わないものなのである。しかし、あなたは、その町でメッセージを受け取るのはほんの僅かな人たちに限られ、その僅かな人たちを入会させただけで、満足しているのかと、尋ねるかも知れない。答えは多分NOであろう。彼らは単に創立者と呼ばれるに過ぎず、彼らの役割は、基礎を築き、骨組みを作ることである。しかし、次々とこの組織に入って、手助けをする人も必要なのである。行政が彼らの友情を深めるために用意した提案よりも、多くの人たちが遥かに進んだものであると感じるような提案を、それも短期間の間に見つけ出すことが出来れば、大成功と言えよう。さらに、どのようにすれば、大勢の人たちの間で、友情を保つことが出来るのだろうか。大勢の人が集まれば、徒党を組んだり、さもなければ、無秩序になるか、活力のないものになりやすいのではないだろうか。

ご存知のように、我々の成長は遅々たるものである。我々は決して烏合の衆であってはならない。我々は数多くのグループの中で、究極のサ

イズにまで制限したグループである。代表者の割合を保つために、どの職業分類にも、他の職業分類を侵犯するような要素を付け加えることを許してはならない。幾つかの職業分類は独特のものであって、決して重複させてはならないし、その他の職業分類でも、例え何十、何百、何千あろうとも、ごく僅かな代表者しか出すことが出来ない。

ロータリーの考え方を完璧に表す唯一の考え方が、一人一業種制なのである。あなたに課せられた課題は、各々の職業分類において正当な人を見つけることである。もし、そのような人が見つければ、あなたは、ロータリーの使命を、彼の仲間の中に植え付けることを、その人に委ねればよい。そのためには、彼がロータリアンとして正当な人であることを、みんなに認めさせて、彼に嫉妬心を抱かないようにさせなければならぬ。彼らは、然るべき人がみんなを代表して会議に臨むことを喜ぶように、彼がみんなを代表してロータリーの座につくことを、喜ぶに違いない。

各々の選挙区から、代表として一人だけ選んだのでは、議会は無力な組織になるという人がいる。しかし何故、各々の職業から代表者を一人

選んだのでは、ロータリーが無力になると言いきれないのであるか。あなたは次のように答えるかも知れない。下院議員は、一定の任期を定めて選ばれるし、もし我々が、そうしたいと思えば、最終的には、落選させる権利を持っている。彼は我々に借りがある。その反面、ロータリアンは選挙ではなく、選考によって選ばれるのである。ロータリアンの任期は一生である。彼に行動を指示する権利を持っている者は誰もいない。これに匹敵するものを作ろうと思えば、ロータリアンの会員制度を選挙制にして、期限つきにしなければならない。

我々が理想とするロータリークラブは、一人一業種の職業分類制度を堅持することであるが、下院議員は、一定の期間を決めて奉仕をするために選挙によって選ばれた代表者であって、生涯を任期として選ばれた代表者ではない。そこで我々は、選挙を管理する方法を考えなければならない。選挙人団をどのようにすべきか。答えはすぐでるに違いない。実業家や専門職種の同業者組織からだせばよい。それは確かに良い方法である。回りを見渡してみよう。我々の町には、あちらこちらに実業家や専門職種の同業者組織が支部を作っている。

今後、ロータリークラブが、これらの同業者組織から、一人ずつ選挙された3年任期の会員で構成されるという通知を受けたとしたら、その変更によつて、ロータリーはどのような利益または損失を受けることになるのだろうか。その利点は、会員が、ロータリーに対して彼らが正当に選挙した代表者になるといふことなので、業界団体の全会員は、代表者としての彼と、彼を選挙した母体としてのロータリーに、関心を抱くに違ひない。ロータリーは職業人の代表者組織であるから、昔からずつと尊敬されてきたのである。損失はどうであろうか。ここでは、形のないうものについて触れてみたい。もし会員が選挙されたものであるとすれば、その会員の自主性が確実に失われるに違ひない。彼は、ロータリーに対してロータリー精神を發揮しないだけではなく、同業者の仲間に対しても同じことが言える。彼はロータリーで、自分の選挙母体の立場を代弁するに違ひない。投票によつて選ぶ問題は、彼らの関心や要望によつて左右されることである。彼の発言と行動は、実業家や専門職としての物の見方ではなく、礼儀作法や利便性といった尺度で評価されることになりはしないだろうか。彼は、職業倫理の問題に対しても慎重に対

処せざるを得ないだろうし、他の仲間たちとの親睦も、それほど自由に
するわけにもいかないだろう。その上、同業者組織の支部が作られてい
ない町も多いし、それがあつた町でも、同業者組織が、特別の評価を受け
た会員たちによつて作られたり、存在しているわけではない。多くの職
業では、同業者組織を必要としていないし、最も優れた人たちが、こう
いつた組織の会員であるとは限らないのである。

長所と短所のバランスは、そんなに簡単に判断することは出来ない。
現実の問題として、今までやつてきた方法の結果に甘んじることが、理
想的な考え方かどうか、ということの問題にしているのである。ロータ
リアンは選考によつて入会すべきであつて、選挙によつて入会すべきで
ないと規定した方がよい。しかし、選考方法は、会員として最もふさわ
しい人を確保するようになくしてはならないし、もし、定められた時間
内に、全力を尽くしてその役割を全うしないのならば、その会員資格に
も期間を定めるべきである。選考された会員は、可能な限り、同業者組
織の正会員であることを義務付け、ロータリーやそれに類似した社交団
体に対する義務として、ロータリーの理念や、類似した社交団体に対す

る関心を持ち続けなければならない。その人の奉仕如何によつて、その人は評価されるべきである。もしも後になつて、クラブが遣わした人が、代表としての価値がないという意見が一致すれば、その価値を持つてゐる他の人に道を譲ることによつて良質の会員を確保するのが最善の方法である。

ロータリークラブの一人一業種の会員制限制度以外にも、検証する必要のある別の制限がある。綱領には次のような記載がある。

「一つの都市、町、村、州、地方に二つ以上のロータリークラブを組織して、これを会員として承認することは出来ない。しかし、至近の国勢調査によつて、人口が一〇〇万人以上で、共有する地域限界を持つてゐる

都市においては、その都市が共有する地域限界内に、明らかに識別可能な二つ以上の商業や取引の中心地を有する場合は、定款・細則を適用することによつて、その都市のすべてのクラブの会員の賛成によつて、各々の商業や取引の中心地にも一つのロータリークラブを組織することが出来る。」

この条項に対する批判があるかも知れない、いや、現実にあるだろう。なぜ、アディショナル・クラブを作る許可は、一〇〇万人以上の人口の都市に制限されるのだろうか。もし小都市に明らかに識別可能な複数の商業や取引の中心地がある場合は、同じように、複数のロータリークラブが許されないのだろうか。次に定款の改正が行われる時には、これが、関心事になることは間違いないだろう。改正論者の間では、一つの商業や取引の中心地の地域限界内に、二番目、三番目、四番目のロータリークラブを作ることが許されるべきであると考える人々がおり、そのように改正することは、強い支持を集めているのである。

その功罪の判定は、問題を孕んでいる。そのようなクラブを作ることによって、ロータリアンやロータリークラブには、どんな影響が及ぶだろうか。ロータリアンがたくさん出来ることは、何はさておいても良いことである。もし、一つの小さな地域にロータリークラブがたくさん出来れば、多分、会員の権威や責任が軽んじられ、活動が衰退し、みんなの問題として、衆目に晒されることになるだろう。ロータリーの会員は、単に個人的に義務を果たすだけではなく、公共に対する責任を担ってい

ることを、心に留めておく必要がある。一つの町の中に二重三重にクラブがあることは、その町の中における会員としての責任が弱まり、その町のロータリークラブとしての活動の傍観者になることである。このように反論して、限定会員制度全般についても、現行の定款の内容をこれから先もずっと、守っていこうと努力する人々がいるのである。

極力、批判を仰ぐようにという皆の要望に従って、我々の出発点にまでさかのぼって探求したが、その結果に自ら失望している。我々が見つけた欠陥は、ロータリーの欠陥でも、理念の欠陥でも、定款の欠陥でもなく、実践方法の欠陥に過ぎないのである。会員の正しい選考方法として定められている制限は、決して欠陥ではなく、それが完全に象徴的になつているところに問題があるのである。

その理念と価値ある実践の担い手として、同僚たちの合意を得た上で、一業種に一名の人を指名することを、ロータリアンの条件として、これから先も守っていくべきなのだろうか。さらに、すべての町のすべての職業人の中で特に優れた指導力を持った最善の人たちによって作られている、光輝く組織である国際ロータリーの全体は、どのような活動をす

ることが出来るのだろうか。ロータリーという組織が、過去にしてきたように、また、年月の経過と共に徐々に改善することを約束してきたように、会員の質を末端の組織が調査して、その適正を証明するよりも、すべてのことを最高に近い方法で処理出来る学術団体のような、工夫をこらすべきではないのだろうか。

こんなに短時間の間に、はるか遠くにまで出かけて、多くのことを成し遂げてきたというのに、試練に耐え切れないかも知れない様なことが変革するこの時代に、何もせずに、そのまま放置することは、決して良いこととは言えないのである。

訳者あとがき

1927年にベルギーのオステンドで開かれた国際大会は、初めてヨーロッパ大陸で開かれた国際大会であると共に、ロータリーが機構上、現在の四大奉仕に分割されたことで、重大な意味を持っている。

誰一人として信用出来る人のいない大都会の中で、心から信頼出来る友人を求めて、会員の親睦と事業上の繁栄を目的にスタートしたロータリー活動に、奉仕という発想が加わったのは、1907年のことである。

その後、1908年に入会してきたアーサー・フレデリック・シエルドンによって提唱された奉仕理念と拡大を巡って、シカゴ・クラブは大荒れに荒れ、その結果、クラブの親睦を守るために考え付いたことが、クラブの連合会を作って、奉仕理念の提唱と拡大の作業を連合会に移すという方法であった。

職業奉仕は、1916年のロータリー通解の発行によって、その理念が確定し、それ以降は、道德律をいかに多くの企業に採用させるかとい

う運動に変わった。身体障害児援助活動に代表される社会奉仕活動は、個人奉仕か団体奉仕か、精神的援助か金銭的援助か、R I 主導かクラブ主導かの議論を経て、決議 23—34 によって、その論争に終止符がうたれた。

さらに国際奉仕は 1921 年のエジンバラ大会において、国際理解と親善と世界平和という究極の目的が確定した。

この時期の特徴は、一般奉仕概念はもちろんのこと、職業奉仕や社会奉仕や国際奉仕の理論構築はほぼ完成したものの、奉仕活動の実践についての基準が出来あがっていなかったことである。

すなわち、ロータリー活動の実態を、「理論と実践」、「親睦と奉仕」、「奉仕の心と奉仕の実践」、「クラブ内の活動とクラブ外の活動」、「*Inside work & Outside work*」に対比させ、一人一業種で選ばれた世に有用な職業の代表者が、毎週一回開かれる友情溢れる例会に集まって、事業上の発想の交換を通じて自己改善を計り、その結果として高められた心を持った個々のロータリアンが、クラブ外の社会即ち、家庭、職場、地域社会、国際社会で奉仕活動の実践をするのが理想的なロータリー・ライ

フとされてきた。

この考え方の特徴は、理念を学ぶ場と実践をする場が明確に分けられており、更に、「奉仕の実践活動をする以前に、奉仕の心を学ぶ」ことが順序だてられていることである。理論と実践は車の両輪にたとえられ、何れを欠くことも許されないが、理論の裏付けのない行動は単にエネルギーの無駄使いだけではなく、運動そのものを危険に陥れる恐れすらあるので、前者をロータリー運動を成立させる必要条件として、定款や細則で厳重に制約し、後者は充分条件として、クラブの自由裁量権に委ねてきたのである。

ただし、従来のこの考え方では、理論の探究が優先される余り、実践がなおざりになり、いわゆる行動の伴わない二重人格者をつくる恐れがあり、更に、ロータリークラブを組織体と見るとき、このやり方ではクラブの実体に添った管理が困難となる短所がある。理論構築がほぼ完了し、奉仕活動の実践が強く叫ばれるようになるにつれ、ロータリーの実践活動に対応した組織作りがどうしても必要になってきた。

そこで、1927年のオステンド大会においてロータリーの組織管理

の合理化が行われ、実践上または管理上の利便から抜本的に再編成されて、現在の四大奉仕に基づいた委員会構成に変更された。すなわち、目標設定委員会 **Aims and Objects Committee** の下にクラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕委員会を置き、理事をそれぞれの委員長に充てるというものであって、現在の委員会構成の原形ともなるものである。

この考え方は、1931年度RI会長シドニー・パスコールと本書の著者ビビアン・カーターが、ロンドン・クラブの一会員であった頃、ハイド・パークを散歩しながら思いついたものだと言われており、RI B I がパイロット・プログラムとして何年か試行した結果、芳しい成果が得られたので、1927年のオステンド大会において正式に採用されたものである。

これによって、ロータリーの奉仕活動実践の実体と、クラブ管理運営の実体とが一致して合理的になったが、その一方で、ロータリーの理念を研鑽する場が、四大奉仕のどの部分で行うのかが特定されにくいことから、とかく、原理が軽視されたり、否定され易い傾向が生まれてくる結果となった。今日、奉仕活動の実践だけが重要視され、ロータリーの

理念研鑽がおろそかになつていゝのも、このあたりにその原因があるのかも知れない。

本書は四大奉仕に分割されたロータリーの理念と活動を、会員に理解してもらつたために書かれた最初の啓蒙書であり、ポール・ハリスも、彼の著書 *This Rotarian Age* の中で、ロータリアン必読の書として紹介しているにもかかわらず、日本ではその存在はあまり知られていない。翻訳は今回が初めてであるが、その原書すら国内にはなく、RI本部にお願いしてコピーしてもらつたという希少価値のある文献である。

著者のビビアン・カーター *Vivian Carter* はロンドン・クラブの会員であり、イギリス人の発想によるロータリー解説書であるため、中間管理組織としての R I B I の必要性、*profits* に対するこだわりや倫理感の低さに対するアメリカ型社会への痛烈な批判、労働組合対策、俗にマスタールと呼ばれる専門的技術を持った従業員への職業分類開放、アメリカ中心の R I 理事会運営に対する批判など、従来のアメリカ中心のロータリーの発想にはなかつた問題を数多く提起している。

同一テリトリーに二階建・三階建のクラブを作るといふ発想は、現在

当然のこととして採用されているし、自分に与えられた職業分類を、社会に奉仕する職業上の責任として、例えば、全国的なストライキが起っても、自分の職業分類に関連する品物やサービスを確保し、通常の業務を止めてでも、最善を尽くして、そのサービスを提供しなければならぬという考え方など、現在にも通用する提案が数多く見られることは非常に興味深い。

1999年11月
第2680地区 1996—97年度

パストガバナー 田中毅

電子文庫版「ロータリー解析」について

この電子文庫版「ロータリー解析」はビビアン・カーターによって書かれたThe Meaning of Rotaryを第2980地区パストガバナー田中毅氏によって翻訳・発行された書籍「ロータリー解析」をご許可いただき、PC上で閲覧しやすいように「A6サイズ」で再編集したものです。

田中PGの言われるように四大奉仕に分割されたロータリーの理念と活動を、会員に理解してもらうために書かれた最初の啓蒙書であり、ポール・ハリスも、彼の著書This Rotarian Ageの中で（「ロータリーの理想と友愛」文庫版13頁）、ロータリアン必読の書として紹介している貴重な文献です。

オリジナルの「ロータリー解析」は田中PGのホームページ「ロータリーの源流」にA5製本版として収録されています。

2007年6月 大阪南RC Y. 木村

The Meaning of Rotary

by Vivian Carter

「ロータリーの解析」

翻訳 田中 毅

文庫化 大阪南 RC 2007.06